

04 現地行程

日程	内容
12月9日(月)	羽田空港発 ✈️ (上海浦東国際空港経由) ✈️ チャンギ国際空港着
12月10日(火)	■ マーライオン公園見学 ■ アジア大洋州住友商事会社訪問 ■ シンガポールシティギャラリー見学 ■ シンガポール国立博物館見学  
12月11日(水)	■ JETROシンガポール事務所訪問 ■ 地元マーケット見学 ■ ガーデنز・バイ・ザ・ベイ見学 ■ マリーナ・バラージ (サステナブルシンガポールギャラリー) 見学 ■ マリーナベイ・サンズレーザーショー (SPECTRA) 見学  

日程	内容
12月12日(木)	■三井化学シンガポールR&Dセンター訪問 ■シンガポール国立大学(NUS)・日本研究会との交流  
12月13日(金)	■シンガポール植物園見学 ■チャイナタウン見学 ■リトルインディア見学 ■アラブストリート見学 ■プラナカン博物館見学 ■振り返りの会   
12月14日(土)	チャンギ国際空港発 ✈️ (上海浦東国際空港経由) ✈️ 羽田空港着

04 シンガポールの基礎情報

…活動地域



- ・ 国旗： 
- ・ 面積：約720平方キロメートル(東京23区よりやや大きい)
- ・ 人口：約564万人(うちシンガポール人・永住者は407万人)(2022年)
- ・ 民族：中華系74%、マレー系14%、インド系9%(2022年)
- ・ 言語：国語はマレー語。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語
- ・ 宗教：仏教、キリスト教、イスラム教、道教、ヒンズー教

・ 略史：

年	略史
1400年頃	現在のシンガポール領域にマラッカ王国建国。
1511年	マラッカがポルトガルに占領され、マラッカ王国が滅亡。 マラッカ王国の王はマレー半島のジョホールに移り、ジョホール王国を建国。 それに伴い、ジョホール王国によって現在のシンガポール領域が支配される。
1819年	英国人トーマス・ラッフルズが上陸。ジョホール王国より許可を受け商館建設。
1824年	正式に英国の植民地となる。
1832年	英国の海峡植民地の首都に定められる。
(1942年～1945年)	(日本軍による占領)
1959年	英国より自治権を獲得、シンガポール自治州となる。
1963年	マレーシア成立に伴い、その一州として参加。
1965年	マレーシアより分離、シンガポール共和国として独立。

外務省WEBサイト「シンガポール基礎データ」より引用

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html>)

04 活動地域



① マーライオン公園

シンガポールのランドマークであり、シンガポールのダウンタウンコア地区の中央ビジネス地区に近い主要な観光名所。

② シンガポール・シティ・ギャラリー

シンガポールの URA センターにある 3 階建てのビジターセンターで、シンガポールの都市変革と将来の計画を展示している。

③ シンガポール国立博物館

民族・文化、自然、アートなどの展示もある歴史系の総合博物館で、1887年に開館したシンガポール最古の博物館。

④ ガーデنز・バイ・ザ・ベイ

シンガポールの都市計画「シティ・イン・ア・ガーデン」の取り組みの1つ。最新技術を駆使した未来型植物園。

⑤ マリーナバレー

貯水や洪水制御の機能のほか、ウォータースポーツなどの施設としても活用されているダム施設。また、国の環境への取り組みが、最新のデジタル技術やアートを使って展示される「サステナブル・シンガポール・ギャラリー」もある。

⑥ マリーナベイ・サンズ

シンガポールを代表する高級リゾート。世界最大の屋上インフィニティプールが有名。

⑦ シンガポール植物園

1859年に開園し、シンガポールで初めて世界遺産に登録された植物園。広大な敷地は、地元の方からもジョギングやピクニックなど憩いの場となっている。

⑧ チャイナタウン・⑨ リトルインディア・⑩ アラブストリート

中心部にある民族文化地区。イギリスの分割統治時代に民族ごとに居住地を定めていた名残で定着したとされている。

⑪ プラナカン博物館

プラナカン文化に特化した、シンガポールの博物館。「プラナカン」とは、15世紀後半から数世紀に渡りマレーシアやシンガポールに移ってきた中華系移民の子孫のこと。

シンガポール国際交流 体験ツアーを通して

碓谷 美月



はじめに

今回のシンガポール国際交流体験ツアーで心に残ったものについて触れると共に、このツアーを通じて千代田区について考えたことを記したい。

シンガポール国立博物館 (Lee Kuan Yewのスピーチから)

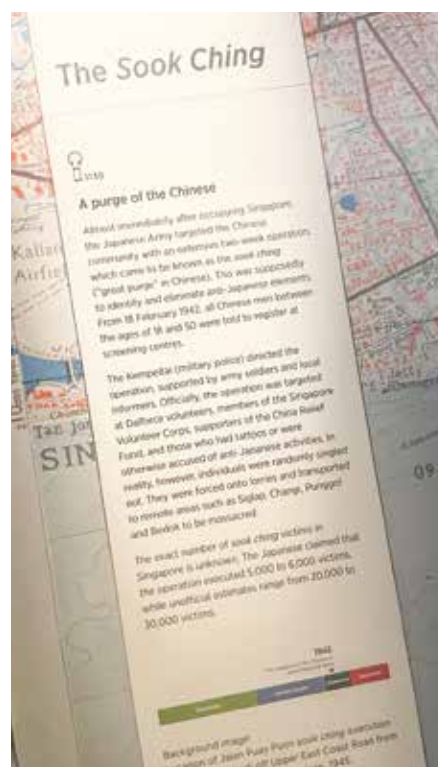
この右の写真はシンガポール国立博物館で撮った写真である。この英文は初代大統領であるLee Kuan Yew (リー・クアン・ユー) が1959年12月3日、Yusof Ishak (ユソフ・イシャク) が国家元首に就任する際に行ったスピーチである。英文は以下の通りである。



“The flag, the coat of arms and the anthem, they serve a powerful emotive function. Men have died for the honour and glory of their flag. Men have rallied and united in instinctive response to their anthems. Small country though we may be, it is nevertheless necessary that we develop these instinctive emotive responses so vital to the survival of a people.”

「国旗、紋章、国歌は、いずれも強い感情を引き起こす役割を果たしている。人々は国旗の名誉と栄光のために命を捧げてきた。また、国歌に触れたとき、本能的に集い、団結してきた。我々の国は小さくとも、民族の存続にとって欠かせない、こうした本能的で感情的な結びつきを育むことが必要である。」

この1959年というのは、シンガポールが自治権獲得をして初の総選挙が行われた年であり、シンガポールの歴史において非常に重要である。シンガポールが分離・独立をした年は1965年であるため、それよりも早い段階から、Lee Kuan Yewはシンガポール国民という価値観の醸成を狙っていたことがわかる。この文を目にしたときに、シンガポールが一つの自治領と扱われてから、現在のような経済的な繁栄を実現するまで、非常に過酷であったことを物語っていると思った。多





様な民族が混在し、今のような民族統合政策も存在しない中で、シンガポールの人々は自分たちの国が今後どうなっていくのか不安だっただろう。しかし、Lee Kuan Yewのスピーチからは、これから、シンガポールはどこかの国の支配にあずかるのではなく、自分たちが国を担っていくという決意を感じるとともに、それにあたって、民族の差異よりも国民としての意識を持つことの重要性が伝わってきた。

多民族・多文化共生とは

(リトルインディアやチャイナタウン、アラブストリート見学から)



今回の派遣で、私は初めてシンガポールに渡航したのだが、シンガポールと聞いてよく耳にするような「多民族・多文化共生」というのは大きな魅力だと実感した。シンガポールで6日間を過ごして、リトルインディアやチャイナタウン、アラブストリートなど異なる民族や宗教が一つの小さな都市国家に濃縮されているような印象を受けた。



しかし、多民族・多文化共生とは本質的に何なのだろうか。

シンガポールは、私が思っていたよりもそれぞれの民族地区が独立していた。というのは、リトルインディアでは主にインド系の人々が生活しており、チャイナタウンでは、ホーカーセンターの周りの雑貨屋や漢方屋にいたほとんどは華人系であったと記憶している。人々だけでなく、売られている伝統衣装や食、それぞれの地区において現地の方らしき人々が話す言語も異なっていた。しかし、それらの地区から出てオフィス街や市街地に行くと、様々な民族の人々が一緒に働いている様子や、共通語として話されている英語の飛び交う様子を目にすることができた。つまり、一つの国に様々な民族が混ざりあって生きてはいるのだが、その文化というのはあまり混ざりあっていないように感じたのだ。私は、これはシンガポールの政府の民族統合における、一つの政策であると思った。



渡航前に行ったグローバルセミナーにて、1965年に起こったマレーシアからのシンガポール分離・独立は、華人系の人々とマレー系の人々の民族対立が大きなきっかけであることを学んだ。特に、マレーシアという国は現在でも、ブミプトラ政策やイスラム教優位の国家運営が行われており、一部の民族や文化が優先される傾向がある。そのような環境の中で独立したシンガポールは、多民族国家として存続するために、各民族の文化や宗教を尊重しつつも、民族間の争いを未然に防ぐための「目に見えない線引き」を行っているのではないかと感じた。それぞれの民族がシンガポール人としてのナショナル・アイデンティティを有してはいるものの、他方でそのエスニック・アイデンティティも同時に大事にするという国家の在り方が印象深かった。



千代田区のこれから

シンガポール滞在中に訪問したJETROシンガポール事務所で、現地のデジタル化政策について伺う機会があった。特に印象に残ったのは、コロナ禍を経て進んだデジタル化の波が、高齢者やデジタルに不慣れな層にとって課題となっているという話である。デジタル化が進む中で、すべての人がその恩恵を享受できるわけではないという現実を考慮し、利用者の多様なニーズに応える柔軟な対応が求められているのだと考えた。具体的には、すべてをオンライン化するのではなく、必要に応じて従来のアナログシステムを併用することが重要であるとお考えだった。

このような包括的なデジタル化の考え方は、千代田区の行政や地域政策にも応用できると感じた。千代田区は多様な住民が暮らす地域であり、高齢者や子育て世代、学生、さらに在勤者など、さまざまなカテゴリーの人々がいる。このような異なるニーズを持つ人々が共存する地域では、シンガポールのように「目に見えない線引き」、つまり多様性を尊重しつつ共通の基盤を持つという政策のバランスが重要であると考えた。例えば、デジタル窓口を導入する際には、ITに慣れていない高齢者向けの対面相談窓口を併設するなど、異なる層への対応策を取り入れるなどである。また、外国人の割合が現在増加傾向にある千代田区だからこそその多言語対応の案内や、シンガポールのように様々な宗教や民族に配慮した食事の提供なども一つのニーズに応えたものであるだろう。こうした包括的な政策は、住民の生活満足度向上に寄与するだけでなく、千代田区の持続可能な発展にもつながると考えた。

今回のシンガポール国際交流体験ツアーに参加したことで、私は自身の視野を広げると同時に、自分の価値観や考え方に新たな視点を取り入れることができた。また、シンガポールの歴史や政策に触れながら、自分の住む地域について改めて見直す機会にもなった。最後に、このような貴重な学びと経験の機会を提供してくださった千代田区の職員の皆さま、そして事業の実現に向けてご支援をくださったすべての関係者の皆さまに、心から感謝の意を表したい。





JETRO シンガポール事務所にて

南方見聞録 ～シンガポールを訪ねて～

植杉 峻也



1. はじめに

本報告では、シンガポールを訪れて、特筆すべきと感じたいいくつかの事項について紹介したのち、最後に研修の目的たる多文化共生についての所感を述べる。

2. デジタル化

2024年12月9日午後8時。シンガポールのチャンギ国際空港に到着した。目を奪われたのは入国審査の簡素さ。事前にオンラインでの入国手続きをした上で、ゲートにパスポートをかざせば手続きが完了する。デジタル化の進むシンガポールが垣間見えた。

そして、研修期間中に伺ったジェットロにて、デジタル化が進んでいる背景についてご教授いただいた。テック系スタートアップを立ち上げやすい土壌が整っていることや、行政が縦割りを排していることなどが理由として挙げられると講師の方がおっしゃっていたが、私の中で特に印象的だったことが、国民がシンガポール政府を信頼しているということだ。その背景としては、政府が経済や国民生活を現在の水準に至るまでに引き上げてきたことが考えられる。今回の研修で初めてシンガポールを訪れたが、話で聞いていた以上にシンガポールは国土が狭い。そして、年中暑く自然に恵まれているとも言えないため、農業や産業にもあまり適していない。そのような国で、どん底から国を豊かにするのは難儀なはずだが、シンガポール政府はそれに成功してきた。選挙があるとはいえほぼ一党独裁に近いような政治体制だが、国を豊かにしてきた実績があるからこそ、国民は政府を信頼しているのではないだろうか。

翻って日本を見てみると、国民は政府を信用していない傾向があると感じる。デジタル化の一環であるマイナンバーカードの導入ひとつとっても、不利益に着目するあまり少しばかりの不具合が大きく報道され、現在に至るまで普及しきったとはいえない。国民性の違いと言ってしまえばそれまでなのだろうが、先進的な取り組みや変革を支える土壌があることには少し羨ましく思う。

3. 住友商事訪問

研修2日目のアジア大洋州住友商事会社訪問。事業についてお話しいただくのかと身構えていたら、3人の社員の方にご登壇いただき、自



己紹介と簡単なプレゼンをしていただいたのちに座談会を開いていただくというもので、リラックスしてお話できる環境を整えていただいた。お話の中で心に残ったことは、新たなコミュニティに参加すること、新たな環境に挑戦することが大事という点だ。確かに、3人の社員の方は、日本人で海外勤務を経てシンガポールで働いている方、シンガポール出身で日本勤務を経て戻ってきている方、東南アジア出身で日本留学を経てシンガポールで働いている方、というようにいずれも新たな環境での挑戦を経験してきている。そして、新たな挑戦は自らが成長するために必要だという。

なるほどと感じた。確かに、自分が今所属しているコミュニティは居心地がいい。サークルの友人たち、中高時代の友人たちとの集まりなどなど。気心の知れた仲の人とは話していて話題の種は尽きないし、1年ぶりに会っても楽しい。一方で、新しい環境にトライするのは疲れる。初対面の人たちと何を話そうか、話しかけに行こうか、といった悩みに加え、アルバイトであれば慣れない手順や作業を覚えたり、勉強であれば今までと少し違う頭の使い方をしなければならなかったりする。これには苦勞が付きものだし、合わないと思って新しい環境から離れることもできる。しかし、自分になかった意見や文化慣習に触れることは刺激になるし、固定観念を見直すきっかけにもなり得る。ずっと新しいコミュニティを敬遠してきたが、最近になってそれを改めようとしていた私には、多いに思い当たる節があり、かつ心を新たにした。

ちなみに、シンガポール人の社員の方に、日本人とシンガポール人の違いについて何うと、日本人はシンガポール人と比べるとコミュニケーションが直接的 (direct) ではないと思う、とおっしゃられていた。そういった文化の違いも挑戦・経験してみて初めて分かることだし、相手に応じてコミュニケーション方法を使い分けるといった方法も取れるため、やはり新たな挑戦は有用だと思う。

4. 多文化共生を目の当たりにして

シンガポールの多文化共生を象徴するランドマークの1つとも言えるのは、アラブストリート・リトルインディア・チャイナタウンである。事前学習の際には、かつてイギリスによる支配がなされていた時、分割統治政策によって人種ごとに居住地が決められていたことを学んだ。その当時の図を現在と対照すると、居住地の場所は昔と今で概ね一致している。イギリス統治時代の名残が残っていると見えよう。また、これらの地域では、高層ビル群が林立するシンガポールのイメージとは違い、アラブ・インド・中国といった別の国に旅行したかのような感覚があった。こうした地域が残っているのは、異なる民族に配慮したシンガポール建国以来の多文化共生政策に由来しているのではないかと感じた。

一方で、シンガポールと言えば高層ビル群と綺麗な街並みというイメージがあったし、実際に中心部の多くはその通りだったが、これらの地域には高層ビルは見られなかった。建物の多くは低層、よくて中層であり、街並みはオフィス街と比べて雑然としている印象を受けた。伝統を



昔のシンガポール



現在のシンガポール中心部

残すことと、街を整備・再開発することは両立できると思うが、イギリス統治時代から居住しているために、土地が何世代も継承され、権利関係が複雑になっており、行政が介入して整備・再開発することが難しいという事情もあるのではないかと考察する。

5. シンガポール国立大学(NUS)の学生との交流

NUSの日本研究会に所属する学生4人と、派遣団員の間で交流会がなされた。まず驚いたことは、NUSの学生たちは日本語を普通に話せる。日本に留学していた方もいるようだが、言語の中でも習得が難しいと言われる日本語を勉強して日常生活には全く困らない程度までに上達させていることには、とても感心した。日本のアニメ好きな方も複数いたので、翻訳なしに鑑賞したいがために勉強したのかもしれない。

続いて、向こうの学生たちは、大学をすでに卒業した私よりも皆年齢が少し上だった。聞けば、兵役をはじめとするNational Serviceに2年ほど勤めなければならず、そのために日本と比べると遅くなるのだという。世界のほとんどの国は軍備を放棄していないし、シンガポールもその例に漏れず、またシンガポールは独立後も国家としての地位を維持できるかが不透明であった時期があるため、国家の防衛は一大事項(国家予算の20%近くを国防費が占める。)であり、兵役が義務付けられているのだろう。聞かれなかったが、日本の場合そのような義務はあるかと聞かれたらどう答えようかと色々考えていた。自国の文化だけでなく、制度や歴史についても答えられるようにしておきたいと感じた。

そして何より、自分の英語力不足を痛感した。NUSの学生たちに比べると、特にスピーキングの点で及ばない。聞いてみたいことはたくさんあるのに、それを言葉でうまく表現できないもどかしさを覚えた。英語を話す訓練を積まなければならないと思うとともに、刺激に満ちた2時間だった。

6. 土地利用

シンガポールは、先ほども書いた通り、国土が狭く、シティギャラリーの展示によれば中心部16平方キロメートルのうち半分は埋立地であるという。そのため、土地の利用方法に工夫がみられた。高層ビルがいくつもあるのは、見栄えのためではなく、少ない土地を効率よく使う秘訣なのだ。そして、ビルとビルの間隔もかなり近接しており、最大限に効率化しようとする意図が窺える。

また、屋上を活用している建物がいくつもあることが印象的だった。研修中個人的に訪れた場所では、建物の屋上がバーになっており、聞くところによれば、スコールは多いが長雨が少ないことからこうした形式のバーなどがいくつもあようだ。年中半袖で過ごすことができるという気候の特性を活かした土地の有効活用は、お洒落でありながらも実用的で、都市計画の一端を担っているのだと感じた。

7. おわりに

シンガポールでは多文化共生政策が奏功しているが、これを日本で、



写真はリトルインディアの一部

仮に地域規模であったとしても実施することは、現在では少し難しいのではないと思う。理由は2つあるが、まずは民族コミュニティが存在することに対する拒否反応が発生しかねないことが挙げられる。シンガポールは建国以来、華僑をはじめとしてマレー人やインド人やアラブ人など異なる人種が混在していることは所与のものであった。一方で日本では、近所に外国出身の方がいると目立つように、日本人が大半を占め、その環境で生きてきたため、外国人の存在は異質なものとして見られがちである。昨今では埼玉県川口市でのクルド人コミュニティが紛争の種になっている通り、外国人コミュニティは受け入れられているとは言えないし、今後もその傾向は続くと思われる。

そして1つ目の理由と関連するが、最大の理由は言語が通じないことだと考える。EFエデュケーションによるテスト結果によれば、日本人の英語力は116カ国中92位に位置付けられるのに対し、シンガポール人の英語力は3位にランクインしている。異なる人種が存在する中で、共生が可能になっているのは、公用語として英語という共通言語があり、かつそれをかなりの人が話せるため、人種や文化が異なっても意思疎通が可能であることが背景にあるように思う。現に、アラブストリートでもチャイナタウンでも、土産物店の人は英語を話していた。確かに、郷に入っては郷に従えという諺のように、外国人にも日本語習得を求める道もあるように思える。しかし、日本語は習得が難しく、また行間を読んだり空気を読んだりといった独特の慣習があり、日常生活で話せるようになるには並大抵の努力では済まない。一方で、非英語圏の出身者でも英語は理解できることがままあるし、日本人も英語は学校で勉強はするため、両者にとって全く分からない言語ではない。私たち日本人が、英語に今までよりも慣れ親しみ、意思疎通の共通言語として使えるようにすることが外国人との共生の鍵ではないだろうか。

また、他文化を理解することが共生と考えられがちだが、私はそうではないと思う。シンガポールには前述の通り民族コミュニティが存在し共存しているが、これは互いに文化を理解しているからではなく、それぞれの文化が異なることを知った上で、その違いを尊重しているからだと感じた。文化や慣習の違いは当然の前提として、自分たちの常識を相手に押し付けず、相手のやり方を尊重する。外国人相手のみならず、日本人同士の関係でも、大いに取り入れていきたい。

最後に、今回の研修に関わっていただいた区役所の職員の方々、旅行会社の方々、ガイドのおふたり、バスの運転手さん、そして団員の皆に、この場を借りて感謝申し上げる。この研修での出会いが、一期一会でなく、今後も続くことを願って。

参考

- ・ <https://sgarchi.wordpress.com/2020/05/23/establishing-the-foothold/> 2025年1月19日閲覧
- ・ <https://www.google.com/maps/> 2025年1月19日閲覧
- ・ <https://www.efjapan.co.jp/epi/> 2025年1月19日閲覧
- ・ <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/kankei.html> 2025年1月19日閲覧

現地レポート

小川 倫太郎



1. はじめに

本報告書は千代田区が主催したシンガポールへの海外事情調査団に参加し、事前研修から現地訪問までの全体を通じて得た経験と学びをまとめたものである。本派遣の目的は、限られた国土と資源の中で先進的な政策を実施するシンガポールを訪問し、戦争・歴史、環境・科学技術、多文化共生・多民族国家などに関する施設の見学や現地の人々との交流を通じて、国際理解を深めることにあった。

2. 事前研修

出発前の事前研修では、シンガポールの政治、経済、教育制度、多文化共生の取り組みなど、多岐にわたるテーマについて学んだ。特にシンガポールが2014年から推進している「スマートネーション（スマート国家）」構想の内容は印象深く記憶している。この構想は、デジタル技術とデータを活用して国全体をスマートシティ化し、「より良い暮らし、より多くの機会、より強固なコミュニティ」を実現しようとするものである。

またシンガポールの教育制度についても学んだ。特に小学6年生が受験するPSLE (Primary School Leaving Examination) の結果に基づき、中等学校でのコースが決定される「ストリーミング制」が約40年間導入されてきたが、2024年から段階的に廃止されることが決定していることは大きな出来事だろう。この改革は、生徒の多様な才能と興味を尊重し、社会的流動性の向上を目指すものである。スマート国家の推進にPSLEの段階的廃止、それらが指し示すに、シンガポールという国は新しい時代へ歩を進めているのだと受け取った。刻一刻と移り変わる世界情勢と同じように、多文化が混在するシンガポールも変革が起きている。そんな渦の中、まさに今訪問できたことに意味があると強く感じた。

3. 現地訪問

3.1 文化と建築

シンガポール市内を歩くと、リトルインディアやチャイナタウン、アラブストリートなど、多様な文化が共存する街並みに触れることで



チャイナタウン



アラブストリート



リトルインディア



マリーナベイ・サンズ

た。これらの地区では各民族の伝統的な建築様式や食文化、宗教施設が調和して存在しており、多民族国家としてのシンガポールの姿を実感した。特にリトルインディアでは色鮮やかな建物やヒンドゥー教の寺院が立ち並び、チャイナタウンでは中華風の建築と市場の活気が印象的だった。アラブストリートでは、モスクの美しいドームと周辺のバザールが異国情緒を醸し出していた。徒歩で国境をまたいでいるかのような、まさに異文化がひしめく国。それらがお互いに侵食することもなく、まさしく共生しているさまは興味深いものがあった。国の共同住宅での民族割合まで決まっているシンガポールでは、多文化の平和において表層では見えない並々ならぬ取り組みがあってこそ今ののだと感じる場面だった。

またシンガポールの建造物には風水の概念が取り入れられているケースが多くあることも知った。例えばマリーナベイ・サンズの湾曲したデザインは、インドネシアへ富が流れないようにという意味や、風水的に良い気を取り込むとされている。他の政府関連の建物や商業施設でも風水の原則に基づいた設計が施されており、伝統と現代性の融合が感じられた。気が付く人は気が付くといった具合の風水の要素も多く、それもまた文化を押し付け合わない、多文化共生の道を歩むシンガポールらしいと感じた。

3.2 食文化と自然

シンガポールの多民族社会を象徴するものとして、食文化は外せないだろう。その象徴であるホーカーセンターでは中華、マレー、インドなど、さまざまな民族の料理が一堂に会し、多様な味を楽しむことができた。このホーカー文化はユネスコの無形文化遺産にも登録されており、シンガポールの食文化の多様性と共存の象徴といえる。我々もホーカーセンターに限らず様々な料理を頂く機会に恵まれ、日々新しいシンガポール料理の一面に出会い驚かされた。

また自然においてはシンガポール植物園とガーデンズ・バイ・ザ・ベイを訪問し、自然と都市の調和を感じた。シンガポール植物園は、国内唯一の世界遺産であり、伝統的で落ち着いた雰囲気の中で多様な植物を観賞できた。一方、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイは、未来的なデザインと最新技術を駆使した庭園で、特にランドマークであるスーパーツリーからの眺望は圧巻だった。また、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ内のクラウドフォレストでは人工的に再現された高山環境と滝があり、自然保護と観光の両立を図った施設として非常に興味深かった。

3.3 ビジネスと交流

今回の派遣では現地の日系企業を訪問し、シンガポールでのビジネス展開について学ぶ機会も用意されていた。シンガポールは日系企業の地域統括拠点多く集まる場所であり、ビジネスの進めやすさやスピード感が魅力とされている。一方で人件費が高いなどの課題も浮き彫りになり、現地での適応力や柔軟性の重要性を感じた。

特に、日系企業がどのようにシンガポールでの競争を生き抜いているか、その戦略や工夫について学ぶことができたのは貴重な体験だった。企業の代表者からは「新しい環境に飛び込み、未知の多くのことに触れること」がこれから社会へ飛び込まんとする若者に覚えておいてほしいことだとアドバイスもいただいた。この言葉は今回の派遣活動全体を象徴するものでもあり、まさしくこの派遣で未知に触れ、必死に咀嚼している最中の私の心に強く響いた。

また、現地の大学生との交流も特に印象深い体験の一つだった。彼らと直接会話することで、シンガポールの若者が直面する現実や、彼らが描く未来像について理解を深めることができた。「夢を持つ若者が少ない」という声があった一方で、自分の力を磨きながらキャリアを築こうとする真摯な姿勢も垣間見ることができた。自身と全く異なる背景を持つ同年代と交流することは、新しい視点の獲得につながる非常に意義深い経験だった。

4. おわりに

今回の派遣を通じて、私自身の視野が大きく広がった。特に多民族国家であるシンガポールの共存共生の姿勢からは、異なる文化や価値観を尊重し、受け入れることの重要性を学んだ。偏見があっては間違ったスタートラインに立ってしまうし、共生などはもってのほかだろう。この学びは、ますますグローバル化が進む現代社会において、一人ひとりが身に付けるべき姿勢でもあると感じた。また、シンガポールのビジネス環境に触れることで、スピード感と柔軟性の重要性について深く考えるきっかけとなった。常に変化する国際社会の中で自分自身も挑戦し続け、新たな環境に適応する力を養っていきたいと強く思う。シンガポールという国が持つ多面的な魅力に触れたことで、世界にはまだまだ知らないことが無数にあるということに気付かされた。

この経験を生かし、これからの活動においても広い視野と柔軟な思考を持ち続けたいと考えている。シンガポールで学んだ多文化共生や精神を、自分自身の生活やキャリアにどう取り入れるべきかを考え続けていく。今回の派遣で得た経験と学びを基盤に、世界と繋がる行動をより一層積極的に行っていききたい。

最後に、このような貴重な機会を提供して下さった千代田区関係者の皆様、現地でお世話になった方々に深く感謝申し上げます。この派遣で得た経験は、これからの人生においても大きな支えとなると確信している。



シンガポール植物園



ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ

シンガポール派遣の報告

片桐 旬



1. マーライオン公園

実際にマーライオンを目の前にすると、その独特なデザインが印象的で、「ここは間違いなくシンガポールだ!」と実感させられた。観光地としてだけでなく、シンガポールそのものを象徴する存在感をもつスポットだと感じた。また、マーライオン公園からの景色はとても素晴らしく、昼間に訪れたが、青空の下、マリーナベイサンズやエスプラネード、高層ビル群などを見渡せて、活気あるシンガポールの風景を楽しめた。マーライオン公園には世界中から観光客が訪れており、様々な言語が飛び交う国際的な雰囲気を感じられた。写真を撮る人々やマーライオンの口から出る水と遊ぶようなポーズを取る人たちを見ると、みんながこの場所を楽しんでいるんだなと思った。マーライオンは1972年に初めて設置されて以来、シンガポールの発展を見守り続けた。シンガポールの歴史を振り返る象徴的な存在であることに気づかされた。移設の経緯や今なお多くの人に愛されている点に、この国の文化や発展が詰まっていると感じた。このようなことから、マーライオン公園は、シンガポールのアイデンティティを感じられるだけでなく、周辺の美しい景観や活気ある雰囲気を楽しめる場所だ。訪れる人にとって、「シンガポールらしさ」を体験できる特別なスポットだと思った。



2. ホーカーセンター

シンガポールには「ホーカー」という食文化がある。ホーカーとはたくさんの屋台が集まった屋台街のことで、家族や友達、同僚、時には一人でも利用する、シンガポールの日常の一部だそうだ。ホーカーの食事はとても安くおいしい。このホーカーという食文化は、シンガポールの多民族共生を象徴している文化だと思った。なぜなら、ホーカーセンターでは、中華、マレー、インド、ユーラシアンといった多様な民族の伝統料理が並び、それぞれが同じ空間で提供されているからだ。これにより、異なる文化の人々が、互いの食文化を自然に共有し、楽しむ場になっている。伝統料理の例としては、中華料理の「海南チキンライス」、マレーシアの「ナシレマ」、インド料理の「ロティプラタ」や「ミーゴレン」、文化が融合した「ラクサ」や「サテ」など、異文化が交わることで、新しい味や調理法が生まれる点も多民族共生の特徴だ。また、ホーカーセンターは民族や社会的地位を問わず、誰でも利用できる庶民的な空間だ。同じテーブルで異なるバツ



クグラウンドの人々が食事する光景が普通に見られるため、自然に交流や相互理解が生まれる場でもあると思った。こうした理由から、ホーカーという食文化は、シンガポールが目指す多民族共生の理念を体現する場として、多くの人々に愛されていると感じた。この場所での食事は、異なる文化が調和し、共に発展してきたシンガポールの歩みそのものを象徴していると言えると思った。



3. ガーデنز・バイ・ザ・ベイ

ガーデنز・バイ・ザ・ベイは、近未来的なデザインが調和したユニークな場所だ。伝統的な公園のイメージを覆すような斬新な設計で、シンガポールが目指す「ガーデン・シティ」という理念を体現している。植物が都市の中でどれだけ美しく融合できるかを実感した。ガーデنز・バイ・ザ・ベイの巨大な「スーパーツリー」はその構造美に圧倒され、自然エネルギーに活用している点に感心した。クラウドフォレストは、涼しい霧の中で世界最大級の室内滝を見ることができ、まるで熱帯雨林にいるような気分が味わえた。様々な高山植物が展示されており、自然界の多様性に驚いた。フラワードームでは、四季折々の花々が展示されており、世界中の植物を一度に楽しめるのが印象的だった。地域ごとにテーマが異なるため、世界を旅するような気持ちになり楽しかった。ガーデنز・バイ・ザ・ベイはマリーナベイのそばに位置しており、ベイエリアの景色も素晴らしかった。スーパーツリーや温室からマリーナベイサンズを背景に見る景色は、写真映えする絶好のポイントだった。また、この施設は単なる観光地だけでなく、持続可能な未来について考えさせてくれる場所である。ソーラーパネルや雨水のリサイクルなどの技術が使われており、環境保護の重要性が感じられ「自然と共生する未来都市のモデル」が具現化されているのが印象的だ。ガーデنز・バイ・ザ・ベイは、自然の美しさと近未来的なデザイン、そして環境への配慮が融合した場所で、シンガポールがいかに先進的であるかを象徴している。一度行くだけでは足りないくらい、多くの魅力にあふれるスポットだった。

4. チャイナタウン・リトルインディア・アラブストリート

シンガポールには、チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートといった多文化的なエリアがあり、それぞれが異なる民族や文化の魅力を存分に味わえるスポットだ。以下に、それぞれの概要、魅力、そして訪れて感じた感想をまとめた。

4-1 チャイナタウン(Chinatown)

概要: チャイナタウンは、シンガポールにおける中華系住民の文化と歴史を色濃く反映したエリアだ。伝統的な中華建築や赤いランタンが並び通り、そして地元の食文化や宗教施設が楽しめる。このエリアでは、19世紀の移民たちの暮らしを知ることができると同時に、モダンなショップやカフェも点在している。

宗教の多様性: 仏教の「ブッダ・トゥース・レリック寺院」やイスラム教の「ジャマエ・モスク」、ヒンドゥー教の「スリ・マリアマン寺院」が



共存している点が印象的だ。

フードスポット: チャイナタウンコンプレックスでは地元のホーカー料理が堪能できる。特に「海南チキンライス」や「チャークエイティオ」などが人気だ。雑貨や漢方薬、伝統工芸品などを販売するお店が並び、お土産探しにピッタリ。

感想: チャイナタウンを歩いていると、シンガポールの歴史と現代が交錯する独特の雰囲気を感じた。特に仏教寺院での静寂と、賑やかな市場の活気のコントラストが印象的だった。多文化共生のリアルな形を感じる場所でもある。

4-2 リトルインディア(Little India)

概要: リトルインディアは、インド文化とシンガポールが融合したエリアで、色鮮やかな街並みとスパイスの香りが漂う活気に満ちた場所だ。インド系移民によって形成されたこの地域は、シンガポールでインドの伝統や宗教、食文化を存分に楽しめるスポットとして有名。

寺院の荘厳さ: 「スリ・ヴィラマカリアマン寺院」はリトルインディアの中心的なランドマークで、美しい彫刻や色彩が圧巻。

食文化: バナナの葉に盛り付けられたカレーやインドスイーツが堪能できる。特に地元のホーカーで味わう「マトンビリヤニ」や「ドーサ」は絶品。

ショッピング: 「ムスタファセンター」は24時間営業のショッピングセンターで、インド系の商品を始め、さまざまなものが手に入る。

感想: リトルインディアを訪れると、シンガポールにいながらにしてインドを旅しているような感覚になった。特に寺院の装飾や市場のスパイスの香り、そして人々の明るくフレンドリーな雰囲気が印象に残っている。カラフルな街並みもフォトジェニックで楽しい体験だった。

4-3 アラブストリート(Arab Street)

概要: アラブストリートは、イスラム文化が色濃く残るエリアで、モスクや中東風の建築が特徴的だ。歴史的には中東やアラビア半島から来た移民たちによって形成されたそう。洗練されたブティックやカフェも点在しており、伝統とモダンが融合したエリアとなっている。

サルタン・モスク: 金色のドームが美しいモスクは、このエリアの象徴的な存在で、訪れる人を魅了していた。

アラビアン・ナイト風のショッピング: カーペットやランプ、香水など中東を感じさせるアイテムが並んでいた。

グルメ: レバノンやトルコ料理を提供するレストランが多く、フムスやケバブ、バクラヴァなどを味わえる。

感想: アラブストリートは、ゆったりとした時間が流れる雰囲気が魅力的だった。サルタン・モスクの壮大さに感動し、路地に並ぶおしゃれなカフェやブティックでは、観光客だけでなく地元の人々も楽しんでいる様子が見られた。中東文化とシンガポールの多様性が見事に調和したエリアだと感じた。

まとめ

チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートの3つのエリアを巡ることで、シンガポールの多民族共生社会がどのように形作られているかを体感できる。それぞれが異なる魅力を持ち、独自の文化

や食、建築を通じて深い歴史を感じさせてくれる素晴らしい場所だった。訪れるたびに新しい発見があり、シンガポールがいかに豊かな多文化国家であるかを再認識した。

5. シンガポール派遣報告のまとめ

シンガポールへの5泊6日の滞在は、多文化共生社会と先進都市としての側面を深く体感できる貴重な経験となった。まず、マリーナベイでは、マリーナベイを背景にしたマリーナライオン像の存在感に圧倒された。公園周辺の整備は行き届いており、観光地としての完成度が非常に高い。訪れる人々の活気から、シンガポールが世界中の観光客を惹きつける都市であることを実感した。

ガーデンズ・バイ・ザ・ベイでは、自然と技術が融合した未来都市の姿を目の当たりにした。スーパーツリー・グローブの壮観なデザインや、夜のライトアップショー「ガーデン・ラプソディー」は圧倒的で、まるで別世界のような感覚を味わった。クラウドフォレストでは、室内滝の壮大さや涼しい霧が熱帯雨林の神秘を再現し、フラワードームでは地中海植物や季節の花々の美しさに感動した。これらは単なる観光施設ではなく、持続可能な都市づくりの象徴でもあったと感じた。

また、チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリートの3つのエリアでは、それぞれの民族文化が息づきつつ、互いに調和している様子に感銘を受けた。チャイナタウンでは、赤いランタンが並ぶ通りや仏教寺院の静謐さが印象的だった。リトルインディアでは、色彩豊かな街並みとスパイスの香りに包まれ、まるでインドを旅しているかのような気分を味わった。特にスリ・ヴィラマカリアマン寺院の荘厳な彫刻は圧巻であった。アラブストリートでは、サルタン・モスクの金色のドームが目を引き、中東文化が感じられる雑貨店やレストランがエキゾチックな雰囲気を出していた。これらのエリアは、シンガポールの多文化共生の象徴そのものであり、異なる文化がそれぞれの個性を保ちながら共存している様子を目の当たりにした。

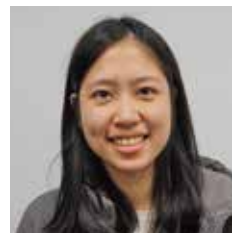
食文化もまた、シンガポール滞在の大きな魅力であった。ホーカーセンターでは、海南チキンライスやラクサ、チャークエイティオといった多国籍料理を堪能した。リーズナブルな価格と手軽さが魅力で、地元の人々に混じって食事をする中で、生活の一端に触れることができた。また、レストランやカフェでは新たな味覚にも出会い、シンガポールがグルメ都市として評価される理由を実感した。

街全体の清潔さや効率的な交通網、緑豊かな景観にも感銘を受けた。地下鉄やバスは整備が行き届いており、どこへ行くにも便利で快適であった。治安の良さや、地元の人々の親切な対応も印象に残る。

この5泊6日の滞在を通じて、シンガポールは単なる観光地を超え、多文化共生や未来志向の都市計画のモデルケースであると感じた。伝統と先進性、自然と技術が見事に調和するこの国の姿は、グローバル社会の中での理想的な在り方を体現している。この旅は、観光としての楽しさだけでなく、学びや気づきをもたらす充実した体験となった。

シンガポール研修 現地報告

蔡 文曦



1. はじめに

今回のツアーでは、多文化国家として知られるシンガポールを訪問した。この国は、イギリスや日本による統治を経て、独自の文化と社会の特徴を形成してきた。戦略的な地理条件と温暖な気候は、貿易拠点としての発展を支え、「ガーデンシティ」として都市と自然の調和を目指す国家の方向性を象徴している。

訪問を通じて、シンガポールは過去の歴史と現代的な都市開発が共存する場であることを改めて実感した。伝統的な要素と未来志向のビジョンが交錯する街並みからは、文化や価値観の多様性が生み出す活力が感じられる。これらの要素がどのように調和し、国家としての発展を支えているかを肌で感じる事ができた。

シンガポールは、単なる観光地としての魅力にとどまらず、歴史や地理的条件を活かした独特の社会システムを持つ国である。その姿勢からは、多様性を尊重しながらも安定した社会を築くための工夫が随所に見られ、非常に興味深い国であった。

2. 戦争と歴史

シンガポールの歴史は、戦争や外国勢力の影響を強く受けてきた。その地理的条件は、古くから貿易の要衝としての役割を果たし、多くの外国勢力がこの地に関心を寄せた。19世紀にイギリスの植民地となり、東南アジアにおける重要な海上貿易拠点として発展を遂げたが、第二次世界大戦中には日本軍の占領を経験した。

1942年、日本軍はシンガポールを占領し、昭南島と改名した。この占領期間は約3年半と短いものであったが、多くの住民が戦争の悲惨さを経験し、特に華僑に対する弾圧やスクリーニング作戦(粛清作戦)は、シンガポール社会に深い傷を残した。その一方で、この期間の出来事は、現在のシンガポール社会における平和と多民族共生の重要性を再認識させる教訓ともなっている。

シンガポール国立博物館では、この時代についても客観的かつ詳細に紹介されている。その展示は、冷静で事実に基づいた記述が多く、歴史的出来事を過度に感情的に扱わない実務的な側面が感じられる。これは、多民族国家としての背景を考慮し、特定の勢力を責めるような姿勢を避けているためと考えられる。また、昭南島時代の歴史が短期間であったこともあり、近代史として記憶が鮮明な人々が多く、記録や証言などの資料が豊富である点も、詳細な展示が可能となった一因といえる。

戦争を経て独立を果たしたシンガポールは、過去の教訓を踏まえ、強い

国家意識と安定した社会を築くために努力を重ねてきた。この戦争の記憶は、単なる過去の出来事として扱われるだけでなく、現在の平和や共存を支える基盤となっている。特に、国立博物館の展示は、訪れる人々に歴史を冷静に受け止めつつ、未来を見据えた視点を提供しているように感じられる。



3. 都市開発

シンガポールは、限られた土地と資源を最大限に活用し、効率的かつ持続可能な都市開発を実現している国である。その都市開発の特徴は、「ガーデンシティ」という理念に象徴される。これは、自然と都市が共存する空間をつくることを目指した政策であり、緑豊かな環境と高度な都市機能を両立させるアプローチが随所に見られる。

訪問を通じて印象的だったのは、都市開発が単なるインフラ整備にとどまらず、住民の生活の質を向上させるための包括的なビジョンに基づいて進められている点である。例えば、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイのような象徴的な施設は、観光名所であるだけでなく、環境教育やエネルギー効率の向上を目的とした設計が施されている。スーパーツリーの構造は、自然エネルギーの活用と美観を兼ね備えており、都市と自然が融合した空間を体現している。

また、マリーナ・バレーの訪問を通じて、水資源の管理が都市開発においていかに重要な位置を占めているかを実感した。シンガポールは水資源に乏しい国であるにもかかわらず、独自の技術とインフラで水の循環利用を実現している。都市のインフラ整備と環境保護が一体となったこの取り組みは、持続可能な開発の先進例といえる。

さらに、都市開発の中で特筆すべきは、住宅政策の充実である。政府主導で提供されるHDB（公営住宅）は、シンガポールの多民族社会において重要な役割を果たしている。多様な人々が共存する環境をつくり出すために、計画的に異なる民族グループを混在させる政策が採られており、これが多文化共生の基盤となっている。

現地で実際に街を歩き、公共交通機関や公共施設を利用したことで、都市全体がいかに効率的かつ住みやすい設計になっているかを肌で感じる事ができた。街路や建物の配置、交通網の整備は、すべてが無駄のない合理的な設計となっており、住民や訪問者にストレスを感じさせない仕組みが構築されている。

特に印象的だったのは、シンガポールのランドマークや象徴的な建築物における風水の取り入れ方である。例えば、マリーナベイ・サンズやシンガポール川周辺の建築には、「気」の流れを意識した設計が施されており、風水が単なる伝統的な考え方にとどまらず、実際に都市計画の一部として具体的に活用されていることが分かった。合理性を追求する都市開発に、精神的な調和の要素が融合している点は非常に興味深い。

正直に言えば、訪問前は風水がこれほどまでに都市開発に影響を与えているとは考えていなかった。現代的で経済的に発展した都市でありながら、伝統的な思想をここまで大切に、実際に都市の設計に反映している姿勢には驚かされた。風水という一見抽象的な思想が、具体的な形で都市の調和や繁栄に寄与しているのを実際に目にすることで、この国の多様性と伝統を尊重する姿勢を改めて実感した。

シンガポールは、伝統と現代性を見事に融合させた都市であり、風水という要素もその一部として重要な役割を果たしている。訪問を通じて、自分の中でこの国に対する理解がさらに深まり、こうした文化的な配慮が都市全体の魅力を形づくる重要な要因であることに気づかされた。

以上のように、シンガポールの都市開発の背後には、持続可能性、多文化共生、そして住民の生活の質を向上させるという強い哲学がある。訪問を通じて感じたシンガポールの都市開発は、単なる経済発展のための手段ではなく、未来を見据えた持続可能な社会を築くための手本ともいえるものであった。

4. 多民族共生

シンガポールを訪問し、多民族共生というテーマがこの国にとっていかに現実的かつ重要な要素であるかを実感した。華人、マレー系、インド系、その他の民族が共存するこの国では、日常生活のあらゆる場面で多様性が自然に感じられる。それは単なる理想論ではなく、都市の設計や政策、そして住民の意識に深く根付いていた。

シンガポールの街を歩いてまず感じたのは、多様な文化が織り成す独特の雰囲気である。リトルインディアやアラブストリート、チャイナタウンなど、それぞれの文化が色濃く反映されたエリアがあり、それらが一つの都市内で共存していることに驚きを覚えた。これらのエリアは観光地であると同時に、実際にその民族の人々が日常生活を送る場でもある。こうした光景を目の当たりにし、多様な文化が互いを尊重し合いながら調和を保っていることを強く感じた。

また、訪問中に印象的だったのは、政府が多民族共生を政策として徹底している点である。例えば、HDB（公営住宅）の分譲では、特定の民族グループが一か所に集中しないよう配慮されている。この「民族比率政策」により、異なる背景を持つ住民が日常的に交流し、互いの文化や価値観を理解する機会が作られている。このような仕組みが、共生を実現するための土台となっていることは明らかである。

教育や公用語の選択にも多民族共生の意識が反映されている。学校では、子どもたちが異なる民族の言語や文化に触れる機会があり、英語が共通語として機能することで、多様な民族間のコミュニケーションがスムーズに行われている。これは、異なる背景を持つ人々が一緒に生活しやすい環境を作り出す上で非常に重要な役割を果たしている。

現地を訪れて特に感じたのは、単に政策が整備されているだけでなく、住民一人ひとりが互いを尊重し合う姿勢を持っているということである。街中で交わされる会話や日常のやり取りの中には、多民族が共生する社会の成熟度が反映されている。こうした社会を築くには、単なる法や規則だけではなく、住民の意識の高さが必要であると強く感じた。

シンガポールにおける多民族共生は、単なる理念ではなく、具体的な形で社会の中に溶け込んでいる。訪問を通じて、文化や価値観の多様性を受け入れ、それを共存の力に変えるシンガポールの姿勢を目の当たりにし、多民族社会の可能性について改めて考えさせられた。

5. 千代田区との比較

千代田区は東京の中心地として、日々多くの外来人口を受け入れてい

る。国内外から訪れる観光客、他地域から通勤するビジネスパーソン、さらには国際的なビジネスの拠点として増加する外国人労働者や居住者など、多様な背景を持つ人々がこの地域に集まっている。こうした多様性を受け入れる都市環境という点では、シンガポールから多くの示唆を得ることができる。

千代田区にも、観光客や国際的なビジネスパーソンとして多くの外国人が訪れているが、多文化共生を意識した都市設計や政策という点ではシンガポールに一步及ばない印象を受けた。例えば、シンガポールの公共空間では英語を含む多言語表示が徹底されており、異なる文化背景を持つ人々がスムーズに移動しやすい環境が整えられている。一方で、千代田区では多言語対応が不十分な場所も見受けられ、訪問者が情報を得るのに苦労する場面がある。この点は、観光地や公共空間での多言語対応を強化することで改善が期待される。

千代田区には大企業や行政機関が多く集まり、国内外からのビジネス来訪者が日々増加している。そのため、多様な人々が利用する施設やサービスの質が重要となる。シンガポールでは、多文化社会を背景にした柔軟なサービス提供が一般的であり、飲食店や公共施設でのハラル対応やベジタリアンメニューの提供など、細やかな配慮が感じられた。千代田区でも、訪問者や短期滞在者が多い地域特性を考慮し、こうした多様性に対応したサービスの充実が求められる。

シンガポールでは、公営住宅HDBや地域コミュニティ活動を通じて、外来者と地域住民が自然に交流できる仕組みが整えられている。一方、千代田区はオフィス街が中心であるため、昼間人口と夜間人口の差が大きく、外来者と地域住民の接点が限られている。この点で、コミュニティを活性化させるための仕組み作りや住民と外来者が交流するイベントの開催は、千代田区が取り組むべき課題の一つであるといえる。

6. まとめ

今回の訪問を通じて、多文化共生、歴史の教訓、都市開発、そして社会の持続可能性という観点からシンガポールを深く理解することができた。この国は、戦争や植民地時代の経験乗り越え、多民族国家として調和を実現してきた。その姿勢は、歴史的背景を尊重しつつ、未来志向である点に特徴がある。また、限られた資源を活用し、効率的かつ持続可能な都市開発を進める姿勢は、多くの国々にとって参考となるものである。

特に印象的だったのは、シンガポールが伝統と現代性を見事に融合させている点である。都市計画には、風水などの伝統的な思想が取り入れられつつ、科学的で合理的なアプローチが共存していた。このような文化的背景の尊重と革新の融合は、多様性を受け入れながら成長する社会の一つのモデルといえる。

一方で、日本、特に千代田区のような多様性が求められる地域では、シンガポールから学ぶべき点が多いと感じた。多文化共生の仕組みや持続可能な開発、地域コミュニティの活性化など、今後の発展において参考となるアイデアが数多く存在している。

今回の訪問を通じて得た知見を、今後の活動や地域社会への貢献に活かしていきたい。シンガポールの成功例は、多様性を力に変えることが可能であることを示している。これを一つの手本として、文化や背景の異なる人々が調和を保ちながら成長できる社会を目指し、持続可能な未来を築くために何ができるのかを引き続き考えていきたい。

現地で感じたこと

齋藤 里奈



1. 印象に残った場所

1-1 ホーカーセンター

チャイナタウンの中心にある古い建物の2階にホーカーセンターがあった。ホーカーセンターとは、数多くの屋台が集まる大規模なフードコートのことだ。シンガポールの多様な食文化がよく表れた場所だ。お昼時に訪れたこともあって地元の人々で賑わっており、中華系、ローカルフード、ご飯もの、デザートと種類も豊富だった。この場所だけでなく、現地での食事全体を通して、日本人にもなじみのある中華系の料理と、プラナカン料理などの色や味が独特な料理の両方を食べることができた。中華系料理は、ホーカーセンターで食べた小籠包や、鶏肉とご飯を組み合わせで作られたチキンライスがとても食べやすく、特に印象に残っている。プラナカン料理は、中華系移民とマレー系の文化が融合した料理で、独特な味わいが特徴的だ。日本ではあまり見られない青色のご飯があったが、新鮮な味わいを楽しみながらおいしく食べることができた。ホーカーセンターをはじめとしたシンガポールの食文化を体験し、多民族国家ならではの独自性や多様性を感じることができたように思う。



1-2 チャイナタウン、リトルインディア、アラブストリート

チャイナタウンには、伝統的な寺院やショップが立ち並び、その中心にある古い建物の地下1階が野菜や魚など食品の卸売市場、1階が中華系雑貨の店、2階がホーカーセンターとなっていた。インド系住民の街リトルインディアには、装飾品や民族衣装などが売られた小さなショップが並んでおり、ストリートアートや色鮮やかな塗装が見られた。そしてアラブストリートには、布や香水、アクセサリーなどを売る店舗が立ち並び、ウォールアートが見られた。チャイナタウンには仏教寺院、リトルインディアにはヒンズー教寺院、アラブストリートにはイスラム寺院と、それぞれのエリアにそれぞれの民族の寺院があり、これらが徒歩圏内に存在していた。日本では国内でこれほど景観の雰囲気が変わることはないので、通りを一つ隔てただけで建造物やそこに施される塗装などの雰囲気がガラリと変わったことに、とても衝撃を受けた。





1-3 プラナカン博物館

プラナカン博物館では、工芸品や宝飾品、家具などの展示を通して、中国・マレー・西洋などの文化が合わさった独自の混合文化に触れた。3階建ての建物の中央が吹き抜けになっており、色鮮やかなランタンが飾られていた。展示では、ピンクや水色、黄緑などの明るい色を用いた色鮮やかな陶磁器が印象的だったが、そのデザインを見ると、日本にも見られるような花や鳥の細かなデザインが施されており、新鮮な色使いとなじみのあるデザインの両方を見ることができた。異文化とは言えども、その独自性を身近に感じられた部分も多くあったと思う。

2. 国内の様子について

日本には見られないこと、逆に日本の方が良いと感じたことが両方あったように思う。前者の例としては、街中にゴミ箱が多く設置されており、街がきれいである点、私服警官のため制服姿の警官がおりず圧迫感がない点、道路に植林が多く見られる点などが挙げられる。千代田区も都会の中では緑の多い地域だと思っていたが、シンガポールでは国全体として計画的に植林をしているというお話を伺い、日本が学ぶべき部分であると感じた。また、この植林のように、国内の至る所に政府の政策が行き届いた光景が見られ、政府側からの働きかけだけでなく、国民が政府を信頼して、その働きかけに応じ協力していることが、国の発展や多民族文化の調和に繋がっているのだと感じた。後者の例としては、道路が整備されており、点字ブロックなどのバリアフリー設備が充実している点、制服警官がいることで抑止力や人々の安心感に繋がっている点などが挙げられる。日本とシンガポールそれぞれに違った良さがあることに気づかされた。また、今後ますますグローバル化が進み、外国人居住者の増加などにより、日本でも多民族化が進行すると考えられている。日本が多民族国家シンガポールに学ぶべきことは多くあると思うが、すでに伝統が確立された日本で、伝統文化を継承しつつ新文化にどう対応し受け入れていくかという点で難しさがあるように感じた。

3. 現地の人々の様子

現地の人々の雰囲気については、外国人を快く受け入れる姿勢が印象的だった。街中を散策する際やお土産を購入する際など、私たち外国人に対して言語が完璧に通じる状況でなくても、相手の立場を考え、相手に少しでも分かりやすく伝えようとする姿勢が何度も見受けられた。現地の人々の多文化調和の価値観が表れているように感じた。また、事業所訪問の際に伺ったお話の中でも、現地の方々との価値観の違いを感じる場面があった。住友商事に訪問した際に

は、海外では仕事を頼まれても頼まれただけではやらないことが多いという話を伺った。なぜその仕事をやる必要があるのかを説明され、その仕事の意義を理解して初めて、仕事に取り掛かるそう。日本では、指示されたことをその通りに行う、頼まれた仕事をすぐにこなすことが求められ、頼まれた側もそれに応えるのが当然だと思っている、そういう点で日本人は勤勉だとその方は仰っていた。自分の普段の生活を振り返ってみても、確かに言われたことをこなしているだけのことが多く、目的や意義を聞かれると答えに詰まってしまうことが多いように感じる。意義を理解した上で仕事や課題に取り組むことで、時間を有意義に使うことができ、完成度を高めることにも繋がる。しかしその一方で、場面によっては、言われたことをすぐにその通りにこなすことが優先されることもあると思う。派遣を通して、こうした価値観の違いを実感すると同時に、どちらの価値観にも良さがあるのだと気づかされた。様々な価値観を知ることで、物事を多角的な視点で捉えられるようになり、それが相手の立場を理解してお互いを尊重し合うことに繋がるのだと思った。

4. 今回の派遣を通して

今回の派遣を通して、現地の方々や団員一人一人の自分とは異なる様々な価値観に触れることができ、多様性は身近なところに存在していることに気づかされたように思う。国民一人一人が自分と異なる他者の価値観を受け止め、お互いの生き方を認め合うことが、多様性を尊重する社会を作ることに繋がるのだと思った。今回の事業に参加してこうした新たな視点を得られたことは、自分にとってとても貴重な経験になったと思う。実際に海外に訪れて現地の方々のお話を伺ったことで、海外に対する関心が更に高まり、自分の将来の選択肢を広げることに繋がった。今後も自分が学んだことを積極的に発信したり、こうした事業に参加したりして、更に知見を広げていきたい。



シンガポールの軌跡 —発展のイデオロギー—

土屋 翔平



1. はじめに

映画『クレイジー・リッチ!』は、多くの人々が抱くシンガポールの『先進的で裕福な社会』というイメージを象徴している。しかし、今日では完成されたように見えるこの都市国家は、建国からの59年で驚異的なスピードで経済発展を遂げた。1965年、シンガポールはマレーシアから分離独立し、経済的にも資源的にも脆弱な国家としてスタートを切った。当時の失業率は高く、限られた資源と狭小な国土は大きな課題だった。こうした逆境を克服し、現在の繁栄を築いた背景には、卓越した指導力と一貫した理念——すなわち「発展のイデオロギー」が存在している。本レポートでは、このイデオロギーを多角的に分析し、東京都を中心とした日本の社会課題を解決するためのヒントを探る。

2. 実際に訪れて

飛行機の窓から目に飛び込んできたのは夥しい数の貨物船だ。これほどの密度で海上を埋め尽くす光景は日本では見られず、シンガポールが「アジアの中心港」として果たす役割の大きさを実感した。

チャンギ国際空港からベイエリアへ向かう道中では、道路沿いに絶え間なく続く植樹が印象的だった。緑化政策への高い意識が伺える。さらに、ランドマークである「マリーナ・ベイ・サンズ」や「シンガポール・フライヤー」、高層ビル群は、この国の持つ経済力の象徴だった。

また、街中で感じたのは「活気」である。人々の生き生きとした様子は、先進国でありながら急成長を続ける途上国のような雰囲気を感じ出していた。一方で、チャイナタウンやカトン地区などでは、伝統的な建築や地元の食文化が色濃く残り、近代的な都市部とのコントラストが印象深い。この新旧の融合こそが、シンガポールの文化的魅力と経済的ダイナミズムを象徴している。



3. ヒト・モノ・カネ・情報のハブ

シンガポールは、「ヒト・モノ・カネ・情報」のグローバルなハブとして機能している。これを可能にしたのは、地理的な利点だけでなく、戦略的な政策と理念である。

・ヒト=多文化共生と人材育成

シンガポールは多民族国家として、中国系、マレー系、インド系の多様性を強みとしている。英語を共通言語としつつ、多言語主義を採用し、異なる文化の人々が共存できる環境を整えている。また、外国人労働者に対してはスキル別に受け入れ枠を設け、社会のバランスを保ちながら経済成長を支えている。永住権（PR）の取得にも厳格な基準を設けることで、多文化共生を実現している。

・モノ=物流の一大拠点

シンガポール港は世界有数のコンテナ取扱量を誇る。これは、地理的優位性に加え、効率的な港湾管理による成果である。1970年代、政府は他国に先駆けて港湾の近代化を進め、現在の繁栄への基盤を築いた。

・カネ=金融ハブとしての地位確立

シンガポールは、低税率や投資家フレンドリーな政策により、多国籍企業の統括拠点として選ばれている。さらに、政府系投資会社テマセク・ホールディングスが国富を管理し、安定した金融基盤を提供している。

・情報=スマートネーション構想

「スマートネーション構想」に基づき、社会全体をデジタル化している。行政手続きのオンライン化やAIの導入により、都市全体が効率化されている。シンガポールでも深刻な高齢化が社会問題となっているが、「Seniors Go Digital」などの取組により高齢者へのきめ細やかなデジタルスキル支援が行われている。



4. 国家の効率的な運営モデル

初代首相リー・クアンユーは、「地政学的弱者」から「アジアの中心地」へとシンガポールを導く戦略を打ち立てた。彼のビジョンは、効率的な運営と透明性を追求する政府の基本方針として現在まで受け継がれている。

・公営住宅政策

住宅開発庁（HDB）が提供する公営住宅政策は、社会の安定と国民生活の向上に寄与している。これは「誰も取り残さない社会を築く」というイデオロギーの表れである。

・腐敗防止への徹底した取り組み

汚職捜査局（CPIB）の設立により、不正を排除し、透明性を保つ。この信頼性が国内外の投資を呼び込む要因となっている。

・持続可能な発展

シンガポールでは現在「グリーンプラン2030」を掲げ、水資源管理や再生可能エネルギーの導入など、長期的な持続可能性を重視している。

5. 文化・教育の力

シンガポールは「教育こそ未来への投資」という信念を持つ。

・多文化共生教育

学校教育において「国民教育」のプログラムが組み込まれている。これは多様性への尊重を促し、国家の安定と調和の重要性を理解させることを目的としている。また各民族の主要な祝祭日（例：チャイニーズニューイヤー、ハリラヤ、ディーパバリなど）に関連した活動が行われ、他の文化や宗教への理解を深めている。

・知識経済の推進

大学や研究機関が産業界と連携し、イノベーションを生み出している。2022年のPISA（国際学力調査）では、読解力、数学、科学のすべてでトップクラスの成績を収めた。要因には国家予算の約20%が教育に投入されていることや、小学校卒業時に受験する全国統一テスト「Primary School Leaving Examination (PSLE)」実施などが挙げられるが、各家庭で子供への教育投資を惜しまない確固たるイデオロギーが存在することも特筆すべき点だろう。

6. 環境への配慮と都市計画

「ガーデンシティ」として知られるシンガポールは、環境保護と都市開発を両立させている。

・緑化政策

屋上緑化や垂直緑化など、都市全体に緑を取り入れる政策を推進。これにより、熱帯気候の緩和や観光産業の育成が進み、都市生活の質が向上している。市民にも緑化の重要性を理解する意識体系が浸透している。

・持続可能な都市計画

再生可能エネルギーの積極的な導入や省エネ型建築の普及が、持続可能な都市の構築に貢献している。



7. まとめと日本への示唆

シンガポールの発展は、資源や国土の制約を克服し、繁栄を実現した「発展のイデオロギー」の体現そのものである。この成功の背景には、効率性、透明性、多文化共生、持続可能性を基軸とした政策が存在し、これらがシンガポールをグローバルハブとして位置付ける原動力となった。

① シンガポールの成功の要因

戦略的リーダーシップ：初代首相リー・クアンユーのリーダーシップを起点とした一貫性のある政策。

多文化共生の実現：異なる民族や文化が共存し、社会の調和を維持。

効率的な都市計画：緑化政策やスマートネーション構想を通じた持続

可能な都市の実現。

経済の多角化と国際化：物流・金融・教育を柱とした多様な産業基盤の確立。

これらは単なる政策の積み重ねではなく、「国民の幸福と経済的競争力の両立」という明確な理念に基づいている。この理念が、政府と市民の相互信頼を築き、シンガポールを揺るぎない繁栄へと導いた。

②日本への具体的な示唆

日本、とりわけ東京が直面している課題—少子高齢化、都市の効率化、地方との格差—に対して、シンガポールの事例は重要な示唆を提供する。

・政策の一貫性と透明性

日本の都市政策も長期的ビジョンを共有し、効率性と透明性を重視する必要がある。たとえば、シンガポールの「スマートネーション構想」に倣い、日本もデジタルインフラを強化し、行政手続きや医療、教育を効率化することで、少子高齢化社会に適応する施策を進めるべきである。

・多文化共生の推進

外国人労働者や留学生の受け入れを拡大し、多様性を社会の活力へと転換する政策が求められる。シンガポールのように、教育や雇用を通じて共通の価値観を育む仕組みを整えることが重要である。

・持続可能な都市計画

環境保護と都市開発の両立は、今後の日本の都市政策の中核となるべき課題である。シンガポールの緑化政策やエネルギー効率の高い建築物から学び、都市の質を高める取り組みをさらに推進するべきだと考える。

③日本の独自性を活かした応用

ただし、日本がシンガポールをそのまま模倣することは現実的ではない。日本の国土規模や文化、歴史的背景に応じて、独自の課題解決モデルを構築することが求められる。たとえば、地方分権を活用して地方都市ごとの特色を活かす「分散型スマートシティ構想」を提案できるだろう。また、日本が強みとする技術力をさらに活かし、AIやロボティクスを取り入れた先進的な都市モデルの構築も視野に入れるべきだ。

④結論

シンガポールの軌跡は、単なる経済発展の成功例にとどまらず、社会問題の解決へ向けた先進的な取り組みを行い、未来を見据えた社会構築の理念を示している。それは「制約を逆手に取り、独自の強みを磨き上げる」ことの重要性を教えてくれる。

日本は、これを自国の課題解決にどう応用できるかを考え、新しい成長モデルを築く必要がある。シンガポールの成功に学びつつ、日本独自のアイデアと価値観を融合させた未来志向の都市政策を描くことが、次世代への鍵となるだろう。

シンガポール国際交流体験ツアーで 得た学び

寺澤 蒼馬



1. 序論

自分は今回、家族の勧めで本国際交流体験ツアーに応募し、参加させていただくことになった。この派遣のそもそもの目的はシンガポールという国の文化、経済、政治などを多面的に観察して自分自身の中で学びや発見を得るものであり、この目的に基づいて考えると今回の体験は自分にとって今までの人生の中で類を見ないほどの有意義なものであったといえる。本レポートではこの派遣体験から得た知見や抱いた所感について触れ、これを通じてたどり着いた自分なりの思いを述べていく。

2. 現地訪問及び体験

本ツアーではシンガポール津々浦々の様々な場所を訪れ、また、現地企業を見学し、社員からシンガポールでの企業の経営形態や企業戦略、人生についての学びなどについての講義を受けた。このうち、私が特に印象に残った訪問先や体験について挙げていく。

(1) Gardens by the Bay

Gardens by the Bayはシンガポール中央の埋め立て地に作られた101ヘクタールという広さを誇る国立公園である。まず自分が興味をひかれたのは、シンガポールという経済大国の最都心部に国立公園が隣接しているという事実であった。Gardens by the Bayには巨大な室内植物園や世界各国からの植物を地域ごとに分類してあるエリアなど、とにかく緑と自然について多種多様な施設が存在している。植物園では標高的に高所に位置する植物など、熱帯地域では見られない植物が展示されていたり、国別のエリアではシンガポール人のルーツである、中国やインドの植物が植えられていた。日本ではこれほどの規模の国立公園が高層ビル街のすぐ横に設置されているなんて光景は自分の知る限りでは見ることはできない。すぐ近くのビル街の喧騒とは打って変わってとても清閑な場所であり、シンガポールに住む人々や観光客にとっての精神的な休息地として大きな機能を持っているようにも感じられた。シンガポールの、緑を大切にする、という理念が垣間見えた場所であった。





(2) Marina Bay Sands

Marina Bay Sandsは言わずと知れたマーライオン像に並んで、シンガポールを代表する巨大なリゾートホテルおよび商業施設である。施設としてのつくりこみや、ここから見た夜景は筆舌に尽くしがたいほどの絢爛さであった。ここまで巨大な商業施設は生まれて初めて見たし、夜景やナイトショーに至ってはこれ以上のものが世界にあるのだろうかと思わせるほどのものだった。ブランド店が施設を席卷していたため、自由なショッピングなどは難しかったが、それでも施設内を歩き回るだけで心躍るような華やかさを感じた。日本の有名な観光名所として、やはり外国人には京都や浅草といった日本文化を肌で感じられる場所が刺さることが多いが、長く植民地時代が続いたシンガポールには、シンガポールにしかない文化というものとは極めて少なく、それをもとにした観光名所というのも見当たらない。このMarina Bay Sandsはそうした、民族的なアイデンティティが見失われてしまいそうなシンガポール人にとっての、国力の大きさを表すプロパガンダ兼資本主義こそが我々の文化であるということの強い象徴としてその輝きを放っているのではないだろうか。

(3) China Town、Little India及びArab Street

China Town、Little India、Arab Streetは多民族国家シンガポールの中であって、特に特定の人種の文化が色濃く反映された街である。ここでの学びはなんといっても、多民族国家の中で存在する、民族ごとのアイデンティティを肌で感じたことである。シンガポールに住む人々は自分たちのルーツに関係なく、つまり、中国人でもインド人でもなく自分たちをシンガポール人であると自己認識している、と事前研修会で学んだ。そうはいっても、全く自分たちのルーツを気にしていないか、と言ったらそうではないらしいということが、これらの街の存在から考えることができる。街にいる人々は自身の民族の文化に浸りながら商売を行い生計を立てているようであった。また、これらの街は、積極的な外資導入で目覚ましい発展を遂げているシンガポールの中心ビル街からはやや離れたところに位置し、物価も割に安かったことから、シンガポールでの熾烈な資本主義の競争では自分たちの居場所を見いだせなかった人々の安住の地として機能しているようにも見えた。日本は単一民族国家であるので、もし日本での競争についていけなくなってしまうと、自分のルーツをたどって安寧を求めることができないと考えた。この観点からみると、民族街というのは多民族国家シンガポールの独自の街並みであって、観光資源にもなりつつ、その特定の民族の心の居所になるような多面的な役割を持つものであるのだ、と感じられた。

(4) シンガポール国立大学の学生との交流会

ここで、特定の名所や企業への訪問ではなく、現地での体験を取り上げさせていただく。この体験は個人的にもこのシンガポール派



遣の中でひととき学びを得るものであった。自分はこの交流会の執行役の一人であったこともあり、開催前は念入りの企画構成をし、無事に会を終えることができたという事実だけでも確かに大きな体験だといえるのだが、やはり大きいのは現地の学生たちの声だった。数々の気づきを与えてくれた、現地学生とのディスカッションの中でも特に自分に深い洞察を与えた事実、それは、シンガポールでは夢を追う文化はなく、みながお金を追い求めて、大学卒業後は企業に就職する、それが美德とされているというところだった。学生の中にはそのシンガポールでの価値観に対して疑問を持つものも、何の疑念も持たず高給取りになることを熱望するものもいたが、ここに自分は大きな疑問を感じた。幸せとは何のことを指すのだろうか、ということである。世界的に資本主義が加速し、日本でも大学三年生ごろから就職活動が始まり、みな大企業を目指すというような構図が一般であることに改めて気づかされた。このような世界において幸せとは何を指すのだろうか。サラリーマンとしてお金を稼いでそれを何十年も続けることが幸せなのだろうか。もちろん、それを生きがいとする人がいるのはわかっているし、むしろそういった方々が99パーセント以上いるのが今日の日本やシンガポールなのだろうことも理解している。しかし、自分にとっての幸せの形はその営みの中では見つけることができないだろうという強い予感を感じた。まだまだ前途が見えないいち大学生にすぎない自分だが、それでも自分の将来について考えを巡らせるべきであるという気付きを与えてくれた点において、この交流会は非常に学びに富んだものになったと感じている。



3. 補遺

その他、シンガポールをめぐる中で抱いた自分の知見をここに記す。まず、食事である。多民族国家であるシンガポールにおいて各地に存在するレストランも多国的であることは当たり前といえば当たり前なのだが、それでも日本では見ない光景として新鮮であった。日本にはこういったエスニック系のレストランは少ない。これらを試しに千代田区で増やしてみるのも、外国人にとって魅力的な街、千代田、として印象よく映り、区の活性にもつながるのではないかと感じた。次に、中心街から少し離れたところに美術館、博物館、シティーギャラリーなどの建物があつたことについてである。これらの建物ではシンガポールの歴史や文化についての展示が確認された。中心街の近くにこれらの建物があるあたり、シンガポールは自国の今までの歩みや営みをこと重んじているのだ、という国民性を見た気がした。

4. 結論

ここまでの自分が今回シンガポールへの派遣に参加して得た学びである。この派遣は自分に世界の大きさと自分が見ていた世界の狭さのギャップを感じさせるものであったような気がする。日本に生まれ過ごしているだけでは知りえなかった、世界の広さとは、民族とは、平和とは？こういった疑問に対する自分なりのアンサーのほんの一端を、今回の派遣の中でつかんだように感じる。常に自分の将来を見据えながら、激動する世界を生き抜く自立した人間になれるように精進していきたい。と、長々とまじめなことを書き連ねてきたわけであるが、一番の感想は、楽しかった。これにつきる。これに関してはこの派遣の団員たちとの絆によるところが大きい。現地で多くのことを学んだ。考えた。見てきた。しかしこうした学びを得られたのもすべてこの団員たちと一体となって主体的に派遣で成長をできたからに他ならない。自分一人では気づけなかったことは山ほどあったことを知り、その一つ一つを紐解いて自分の中に落とし込むこともできた。その意味で、団員達やこのような機会を与えてくださった千代田区には感謝してもしきれない。本当にありがとうございました。

シンガポール国際交流体験ツアーを通して感じたこと

橋本 猛



★はじめに ～今後のツアー参加を希望する人に向けて～

私の志望動機は「シンガポールの先進的なまちづくり・政策を学び、地元千代田区の将来に対する自分の意見を確認すること」であった。私は一建築学生として、また千代田区出身の者として上記のことを実現するために、シンガポールへ調査研究の目的をもって渡航した。そして、当初の目的達成することができた。しかし、派遣を終えて思うことは、目的を達成できたこと以上に派遣団のメンバーと人生のこのタイミングで出会い、濃密な6日間を過ごさせていただいたことへの感謝の気持ちである。我々派遣団は、千代田区在住という側面を除くと全く違うバックグラウンドを持った全12人のメンバーで構成された。それぞれ専攻している学問は異なり、最大でおよそ15年の年齢差があった。一見すると不調和で結束しようがないように思われたが、6日間という非常に短い時間の中で、年齢や些細なバックグラウンドというような最も身近で本質的な差異を認め許しあう、もしくは乗り越え克服したと感じている。結果として素晴らしいチームへと成長した。この経験は派遣団全員にとって非常に有意義なことであり、シンガポールの各名所・日系企業への訪問と同じくらいの学びや個々人の成長につながるものであった。このような機会を作ってくださった千代田区の職員の皆様、千代田区民の皆様への感謝は言葉に表せないほどのものとなった。今回の団長を務めた私から今後のツアー参加者に最も伝えたいことは「ツアーを通して出会えた仲間との縁を大切にすること」である。ツアーのプログラムすべてに、全力で楽しみながら学ぶ姿勢を忘れずに挑むことができ、非常に有意義であった。以下では、私が今回のシンガポール国際交流体験ツアーで学んだことを紹介する。



★シンガポールの町を歩いて ～現地ガイドさん・学生さんから伺ったお話～

シンガポールは後背地を持たない都市国家である。マレーシアから独立して目覚ましい発展を遂げた一方で、国土の小ささや資源の乏しさをはじめとする様々な困難を背景に持ち、現在もそのような





現実に苦しみながらも懸命に前進している。一般的に、シンガポールという言葉から連想されるイメージはマリーナ・ベイ・サンズの美しいフォルムやきらびやかで未来的な都市であると思う。実際に現地へ赴くと写真以上に豪華絢爛な景色が目の前にあった。チャンギ空港から都市中心部への立体高速道路を介したアプローチ、高層ビル群やサイエンスパークなどのゾーニング及び観光名所の配置等すべてが魅力的で思考が凝らされているように感じられた。一方で、現地ガイドさんと学生さんから伺った言葉が強く記憶に残っている。それは「シンガポール国民はシンガポールで休日を過ごさない」という言葉である。一見すると、日本においても海外旅行は人気であるから大した問題ではないように思える。しかし、私はこの言葉が豊かな国土に恵まれた日本人が改めて真剣に考えるべき要素をはらんだ言葉であると確信している。それは、地元住民のための地域、空間の確保である。シンガポール都心部には驚異的なほど緑地が整備されていて高層ビル群は豊かな緑の空間とともにある。そして公園やランニングコースも整備されている。しかし、実際それらの緑地を享受しているのは海外からやってきたビジネスマンや観光客が多いということを知った。また、観光客にとってマリーナ・ベイ・サンズやシンガポール・フライヤーは何度も訪れたい名所かもしれないが、現地住民の方々は1度のみ行く、もしくは一度も行かない人が多数を占めるそうだ。物価が隣国のマレーシアより高いため、そのような施設は地元住民にとって物理的には近いが心理的には遠い存在なのかもしれない。経済的に強く、東南アジア地域をリードする国であり続けるためには海外からの力が非常に重要であり、観光客が来るからこそ成り立っているビジネスは多く存在する。このような事態は日本でも起こりうることであるため個人として考えるべきことであると感じた。



★JETRO訪問

貿易という側面から日本経済を支えているJETROシンガポール事務所では、統計データをもとにシンガポールの現状と、経済面からの分析および日本が学ぶべきポイントをご教授いただいた。特に印象に残っていることとしては、ユニコーン企業数が日本の2倍存在しているということである。お話によると、日本企業は海外の企業に比べて様々な側面でレスポンスが遅いということや、コミュニケーションの在り方が独特であるということが要因として挙げられるそうだ。日本のユニコーン企業数が少ないことに関する上記のような要因は日本の文化や慣習とも密接にかかわる部分であると思い、今後海外で生活する場面などで考えるべきことであると思った。

★三井化学R&Dセンター

ここでは主に、シンガポールに拠点を置く企業の目的や考え方に

関して学んだ。特に印象に残っていることは、各企業がシンガポール政府の政策に合わせて事業戦略を行っているということである。三井化学では、シンガポール政府が公表している研究・イノベーションに関する5カ年計画をもとに、パイプラインを増やして多方面で事業に参画しながら短期中期長期で計画を練り、定期的にそれぞれの事業を継続するか否か判断しているそうだ。シンガポールで事業のきっかけを生み出し、東南アジア、オセアニア地域で社会実装して最終的に三井化学の本社の売り上げにつなげているそうで、このことからシンガポールがアジア大洋州の地域統括拠点としてふさわしいことがわかった。

5カ年計画に関して:

<<https://www.jetro.go.jp/biznews/2020/12/5f879ba18997533e.html>>





三井化学シンガポールR&Dセンターにて

シンガポールを訪れて

山本 真衣



1. はじめに

私の住んでいる地域周辺は、国同士の対立が激しいため、多民族国家であるシンガポールを実際に訪れ、歴史や文化を学べば、日本で多文化共生社会を実現するためのヒントが得られると思い、今回の国際交流体験ツアーに参加した。本レポートでは、実際に現地で学んだ多文化共生への取り組みや現地で新たに感じたこと、今後の展望について記述する。

2. 多文化共生社会

JETRO シンガポール事務所

3日目に訪れたJETROシンガポール事務所では、ビジネス拠点としてのシンガポールの良さと、現地の人々の生活も大切にしているシンガポール社会についてお話を伺った。具体的には、シンガポールは政治・社会が安定しており、英語が公用語であるため、ビジネス拠点として魅力的な場所であることを学んだ。加えて、住宅の民族比率に気を付けていることや住宅に対する保障、リスクリングへの支援など、現地の人々の暮らしを支援するシンガポールの手厚い社会保障についても知れた。私は、シンガポールに日系企業が多く進出しているため、主に海外企業や外国人労働者に対する政策に注力しているのではと思っていたので、現地の人々の暮らしや教育も大切にしているシンガポールに驚いた。

ホーカーセンター

多文化を象徴する場所として、3日目の昼に訪れたホーカーセンターが印象に残っている。シンガポールにはホーカーセンターと呼ばれるフードコートのような場所が各地にあり、私たちが訪れたところでは、シンガポール料理だけではなく、中華料理、ベトナム料理、そしてインド料理など様々な国の料理が一つの場所で楽しめた。食を通して色んな国の文化を学ぶこの場所は、シンガポールが色んな文化が融合している国であることを象徴していると感じた。



ホーカーセンターで食べたチキンライスの写真。
有名店やミシュランの料理が気軽に食べられる魅力的な場所だった。



現地大学生と交流。
日本語で行ったアイスブレイクのゲームで全敗してしまうほど、日本に詳しく、日本語の勉強をとても熱心に行っていた。



シンガポール国立博物館の日本展示。
日本がシンガポールを占領した歴史について映像を用いて大々的に紹介しているところが、とても印象に残った。



アジア大洋州住友商事会社のオフィスで行った座談会
これを機に、帰国後、毎日英会話学習を行うようになった。

3. シンガポールと日本の関係

シンガポール国立大学 日本研究会との交流

シンガポールの学生と交流して、日本文化の知名度が高いことや日本がとても親しみのある国であることに驚いた。今回関わった学生達は全員、日本のアニメなどへの興味関心から、日本語がとても流暢だった。加えて、日本を頻繁に訪れるという話を聞いて、多くのシンガポール人にとって日本は非常に身近な国であることを実感した。

シンガポール国立博物館

特に、第二次世界大戦中の日本が昭南島としてシンガポールを植民地支配した歴史の展示が一番印象に残っている。日本がシンガポールに対して行ったことについて、当時の資料が多く展示されていた。私は、小学生の頃から歴史の勉強をしていたが、昭南島の歴史を具体的に勉強したことがなかった。そのため、シンガポールの方が知っている歴史と日本人が知っている歴史に大きな差を感じ、これを埋めるために、世界の歴史をもっと深く学ぶ必要があるのではないかと考えた。

4. 世界で活躍する日本人

2日目には、アジア大洋州住友商事会社のオフィス、4日目には三井化学シンガポールR&Dセンターに訪れて、シンガポールで勤務するに至った経緯や海外で活躍する機会を掴む方法についてお話をお聞きした。私はこの2社の訪問を通して、2つの言葉が印象に残っている。1つ目は「努力し続けること」、2つ目は「機会は限られていること」である。前者は、アジア大洋州住友商事会社さんで座談会を行った際に、人事の方が海外で働くためにオンライン英会話を毎日欠かさず行っていることや大人になっても学び続けることが大切だという話を聞いた時に教わった。後者は、三井化学シンガポールR&Dセンターで現地での勤務に至った経緯を伺った際に、機会は限られているため、積極的に挑戦することが大切というお話から学んだ。これらの話は、就活生の自分にとって強く心に残る話であり、日常的に努力を重ね、積極的に行動することの大切さを再認識した。

5. まとめ

多文化共生社会を実現するためには、お互いの文化を尊重するだけではなく、お互いの歴史をきちんと学ぶ必要があると、今回のツアーを通して考えた。千代田区には多くの大使館があり、色んな文化を学べる環境が整っているが、今まで自ら主体的に学ぼうと思わなかった。今回ツアーを通して、シンガポールは身近な国であるが、知らないことが多かったと感じ、シンガポールについて詳しくなれたと思っている。これからも海外の歴史を学び続けていきたいし、その際に日本との関わりも結びつけて勉強したいと考えた。

そして、海外で活躍している日本人と交流を通して、将来において大切なことをたくさん教えていただいた。ここで聞いた一つ一つの言葉を忘れずに、これからの人生に活かしていきたいと思う。加えて、海外で活躍することに強い憧れを抱き、自分の就職やその先の将来について幅広い視野をもって考えようと改めて感じた。

最後に、千代田区民として、今回のツアーで初めて千代田区のプロジェクトに参加することができ、区役所の方や千代田区で活躍する同世代の仲間たちと交流する貴重な機会をいただけた。この機会を大切にして、これからも積極的に千代田区のプロジェクトに参加したりすることで、千代田区のことをより深く学び続けていきたい。



シンガポールを訪れて

吉川 玲



1. 企業訪問から学んだこと

アジア大洋州住友商事会社

住友商事では、シンガポールにおけるビジネス展開と、その背景にある考え方を学んだ。特に印象に残ったのは、社員の方が話してくださった「チャンスは必ず掴むべきだ」というメッセージである。この言葉から、挑戦する姿勢や前向きなマインドセットの重要性を学んだ。また、同社が推進するワークライフバランスの取れた働き方にも感銘を受けた。社員の方々は効率的かつ柔軟に働きながらも、自己研鑽や家族との時間を大切にしているとのことだった。

さらに、日本とシンガポールのビジネス文化の違いについても興味深い話があった。シンガポールでは、余計な挨拶や形式的なしきたりを省き、迅速に事業の話に移ることが一般的だといわれた。この迅速性が、シンガポールのビジネス環境を効率的で魅力的なものにしている要因だと理解した。



JETRO シンガポール事務所

JETROでは、シンガポールが日本企業にとって実証実験の場として非常に適している理由について学んだ。特に印象的だったのは、シンガポールが日本と同じ課題、例えば出生率の低下やゴミ問題、高齢化社会といった課題に直面している点である。そのため、日本企業が自国で抱える問題をシンガポールでテストし、得られたデータや成果を日本に持ち帰るという流れが効果的であると説明された。

また、シンガポールがスタートアップハブとしての地位を確立していることや、緑化政策やフードテック分野での先進的な取り組みについても知ることができた。特に環境政策においては、シンガポールがアジア地域のモデルケースとなっており、持続可能性の観点から日本が学べる点が多いと感じた。

三井化学シンガポールR&Dセンター

三井化学では、女性の社会進出が進んでいるという話しが特に印象的だった。現地の女性管理職の割合が40%を占めるという事実は、性別に関係なく能力を尊重し、多様性を受け入れるシンガポールの職場文化を象徴していると感じた。社員の方々は、異なる意見や背景を持つ人々との協働が新しい価値を生み出す原動力であると強調していた。このような違いを尊重する姿勢は、日本の企業文化にも取り入れるべきだと感じた。



また、三井化学が環境技術の開発に注力し、シンガポールの規制が比較的緩い環境を活かして、柔軟に研究開発を進めている点も興味深いものであった。こうした取り組みにより、国際市場での競争力強化が図られるだけでなく、得られた成果が日本国内にも還元されると伺い、シンガポールが事業開発における重要な拠点であることを実感した。

2. シンガポール国立大学・日本研究会との交流



シンガポール国立大学・日本研究会との交流では、多文化主義や異文化理解について深く議論することができた。現地の学生たちは、日本文化に対して高い関心を持っており、特に日本の伝統文化や現代文化の相違について熱心に質問してくれた。一方で、彼らの多くは将来の夢がないという現実主義的な考え方を持っており、「今お金を稼げれば良い」といった価値観を持つ学生が多いことが印象的だった。

また、シンガポールでは英語が共通言語として使用される一方で、中国語、マレー語、タミル語といった各民族の言語も尊重されている。こうした環境で育つ学生たちは、言語に対して積極的に学ぶ姿勢を持ち、ほとんどの学生が日本語や英語を流暢に話せる点に驚いた。さらに、物価の高いシンガポールでは遊ぶ機会が少なく、隣国マレーシアで過ごすことが多いという現実も、彼らの生活の工夫として興味深いものであった。

ディスカッションの中では、現在のシンガポールの教育システム、特に小学校卒業時に実施されるPSLEテストの必要性について意見を交わした。学生たちは、このテストが子どもの人生を早い段階で決定づけてしまう点に懸念を抱いており、改革の必要性を訴えていた。このような話題を通じて、日本の教育や文化が単一的である一方で、シンガポールでは多様性と現実的な視点が根付いているという違いを実感した。

この経験を通じて、異文化理解の重要性を改めて感じるとともに、自分自身の視野を広げる貴重な機会となった。

3. 多文化社会を象徴する地域と施設



シンガポールの多文化社会を象徴するチャイナタウンやリトルインディア、そしてプラナカン博物館を訪れる中で、さまざまな文化の融合と共存を実感した。

チャイナタウンにあるホーカーセンターでは、多民族が混ざり合うシンガポールならではの食文化を体験した。特にプラナカン料理では、鮮やかな青い色をしたお米が印象的で、その独特な見た目が視覚的にも楽しさを提供していた。ホーカーセンター全体に漂う活気ある雰囲気の中で、異なる文化の料理が集まる様子は、シンガポールがいかに多文化共生を日常生活に根付かせているかを感じさせてくれた。

プラナカン博物館では、プラナカン文化の豊かさとユニークさを体感した。展示されている食器の数々は、明るい色彩で彩られたカラフルなデザインが特徴的であった。特に、暗めの色調ではなく明るく華やかな色合いが多いことが印象的で、プラナカン文化が持つ明るさや開放的な雰囲気を反映しているように感じた。

これらの体験を通じて、シンガポールが多文化共生を社会の中でどのように形作り、文化を保存・発展させているのかを学んだ。また、食文化や日用品を通じて多文化主義を日常的に感じる仕組みが整っている点は、日本でも参考にすべきだと感じた。このような多様性を受け入れる文化が、シンガポール社会の強みの一つであると強く実感した。

4. シンガポール国立博物館で学んだ歴史

シンガポール国立博物館は、同国の歴史を理解するために欠かせない場所であった。博物館では、シンガポールの植民地時代から独立、そして国際都市としての地位を築く過程が詳細に展示されていた。特に印象的だったのは、独立後の国家建設において、政府が多民族間の調和を図り、国際競争力を高めるために実施した政策である。

展示方法が非常に効果的であった。日本の侵略に関する展示では、日本軍が侵略した地域が徐々に赤く染まっていく様子が表現され、侵略の印象が強烈に伝わってきた。侵略の過程を強調する音楽と色の使い方が巧妙で、歴史の教科書とは異なり、視覚的にわかりやすく情報が表現されており、まるでその場にいるかのような感覚を覚えた。また、展示は客観的で、シンガポールだけの視点ではなく、日本人がシンガポール人を助けたエピソードも紹介されており、多角的な視点で歴史を学べた。

特に印象に残ったのは、Lee Kuan Yew初代首相の展示である。新聞形式で時系列に沿って整理されており、彼のリーダーシップとシンガポールの発展過程がよく理解できた。シンガポールがどのように経済成長を遂げ、社会的安定を図り、国際的なビジネス環境を整えたのか、その歴史から学ぶべき重要な教訓を感じた。



5. ガーデنز・バイ・ザ・ベイと

シンガポール植物園：自然との共生

ガーデنز・バイ・ザ・ベイとシンガポール植物園は、シンガポールにおける自然環境と都市開発が融合した象徴的な施設である。どちらも観光地としての魅力のみならず、環境保全や教育の場としても重要な役割を果たしている。

ガーデنز・バイ・ザ・ベイでは、50メートルの高さを誇る人工スーパーツリーと多様な植物が展示された温室が印象的であった。スーパーツリーは太陽光発電や雨水収集を取り入れており、環境技術と観光を両立させている点が素晴らしいと感じた。一方、シンガポール植物園はシンガポール初の世界遺産で、熱帯植物の多様性を体感できる貴重な場所である。観光客だけでなく、地元住民が日常的に訪れ、リフレッシュしている姿も見受けられた。

これらの施設は、シンガポールの“City in a Garden”というビジョンを具現化しており、都市化が進む中で自然との共生を目指している。特に、観光客にも楽しめる形で環境施設を設計している点は、持続可能な都市開発の優れたモデルとして非常に参考になった。

緑が少ない都市に住んでいる私にとって、ガーデنز・バイ・ザ・ベイやシ

ンガポール植物園の豊かな自然は非常に新鮮で、都市における自然環境の重要性を再認識する貴重な機会となった。都市と自然が調和する未来の可能性を改めて感じた訪問であった。



6. 緑化計画と都市政策

シンガポールの緑化計画は、都市政策の中核を成す重要な要素である。政府が掲げる“City in a Garden”というコンセプトのもと、都市と自然の調和を目指した取り組みが行われている。具体的な施策としては、街路樹や公園の整備に加え、建物の屋上や壁面を利用した垂直緑化などが広く採用されている。

これらの緑化計画は、環境保全だけでなく、住民の生活の質の向上や観光産業の振興にも貢献している。例えば、ガーデنز・バイ・ザ・ベイや植物園は観光地としての価値を持ちながら、地元住民にとっても重要な憩いの場となっている。さらに、垂直緑化や都市の緑地計画は地球温暖化対策としても効果的で、シンガポールが持続可能な都市モデルを築き上げていることがわかった。

特に印象的だったのは、シンガポール全体に豊かな緑が溢れている点である。屋上緑化や壁面緑化、都市をつなぐ公園ネットワークなど、緑と都市機能の調和が目立つ。また、緑被率が47%以上ということは、世界的に見てもトップクラスの緑を誇り、驚いた。

私は普段、緑地が少ない都市に住んでいるため、緑が生活に与える心理的な効果や都市全体に与えるポジティブな影響について深く考える機会となった。シンガポールの緑化計画は、環境政策の重要性とその市民生活への具体的な導入方法を学ぶ貴重な体験であった。

7. まとめ

今回のシンガポール研修では、企業訪問や多文化交流、自然環境との共生、歴史的背景の理解など、多岐にわたるテーマを通じて、同国の魅力と可能性を多角的に学ぶことができた。シンガポールは、小さな国でありながらも、都市開発、環境政策、多文化共生の分野において世界の先頭を走る存在であり、その姿勢は日本が学ぶべき点が多いと感じた。

また、多文化主義や緑化計画など、シンガポールが掲げる政策の裏には、政府の明確なビジョンと国民の理解・協力が存在していることを実感した。このような環境は、一朝一夕で成り立つものではなく、歴史的な背景と先見的政策が結びついて初めて実現されるものだと感じた。

特に、シンガポールの「国際都市」としての役割を知る中で、多文化共生の重要性やビジネスのグローバル展開に必要な視点について多くの気づきを得ることができた。これらの経験を自分自身の成長に活かし、将来的に異文化交流や持続可能な社会の実現に貢献できるよう努めていきたいと思う。

シンガポール研修で得た学びは、今後の自分の人生や活動にとって、大きな指針となるだろう。さらに、今回の経験を同世代や周囲の人々に共有することで、より多くの人々がシンガポールの成功事例やその背景に興味を持ち、新たな視点を獲得きっかけとなれば幸いである。

シンガポール研修を終えて 感じたこと

渡辺 侑大



1. はじめに

令和6年度の国際交流体験ツアーは、シンガポールでの都市開発や歴史について学習を目的として実施した。シンガポールでは歴史や文化を学ぶため、シンガポール国立博物館、シンガポール植物園、チャイナタウンやリトルインディア、プラナカン博物館等を訪れた。また、都市開発を学ぶためにシンガポールシティーギャラリー、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイ、マリーナ・バレーを訪れた。さらに現地の日系企業やシンガポール国立大学の人々と交流し、現地での活動内容や現地の状況などをお聞きする良い機会も設けていただいた。これらの内容を踏まえて、これからシンガポールの文化や歴史の学び、シンガポールの都市開発の学び、さらに日系企業を訪問して感じたことの3つのパートに分けて述べる。



2. シンガポールの文化や歴史の学び

シンガポール国立博物館では、日本占領時代におけるシンガポールの苦難の歴史を深く学んだ。第二次世界大戦中、日本軍の占領が市民生活に及ぼした影響や、戦争がこの地域に残した傷跡について、展示を通じて具体的に理解することができた。この時代の歴史を振り返ることで、現代のシンガポール社会が平和と繁栄を重んじる背景を改めて知ることができた。一方で、シンガポール国立大学の学生との交流でフリートークを行った際、戦時中の話題が出た。彼らは日本との戦時中に対して否定的な意見を持っている者もいたが、「現在のシンガポールの発展には日系企業の貢献があり、日本人に感謝している」との意見も聞かれた。このような意見を聞き、複雑な思いを抱いた。この経験を通じて、日本で生活していると原爆の被害や自国の苦難に焦点が向きがちであることを改めて感じた。しかし、日本が他国に与えた影響を学び理解することも同様に重要であると認識した。今後、シンガポールに関する話題が出た際には、今回の学びを積極的に共有し、多様な視点で歴史を考える機会を作っていきたいと考えている。

また、プラナカン博物館では、プラナカン文化の多様性と独自性に触れる機会を得た。プラナカンとは、主に中国系移民と現地住民の文化が融合して形成された独自の民族グループであり、その華やかな衣



装、精巧な工芸品、伝統的な料理などが紹介されていた。この文化は、シンガポールの多文化社会を象徴するものであり、異なる文化の融合が新たな価値を生み出す可能性を示している。また、研修中には現地でプラナカン料理を味わう機会もあった。プラナカン料理は、中国料理とマレー料理などが融合して生まれた独特の料理である。その中でも、特にカレーに青いご飯が添えられた料理が印象的だった。青いご飯の正体はココナッツで、日本では見たことのないものであった。しかし、実際に食べてみると、カレーのスパイシーさとココナッツのほんのりとした甘みが絶妙に調和しており、大変美味しく感じられた。

3. シンガポールの都市開発の学び

まず、シンガポールシティギャラリーでは、シンガポールの都市開発の歴史と未来のビジョンについて学んだ。展示では都市全体の模型があり、人口密度の高い国土でどのように土地を有効活用してきたのかが詳細に説明されていた。特に、緑地の確保や水資源の管理に対する取り組みは印象的だった。限られた空間で住みやすい都市を実現するために、政府や専門家が長期的な視点で計画を立てていることがよく理解できた。



次に、ガーデンズ・バイ・ザ・ベイでは、環境に配慮した都市開発の象徴ともいえる緑化技術を目の当たりにした。特にスーパーツリーのデザインと機能には驚かされた。これらの巨大な構造物は単なる観光名所ではなく、太陽光発電や雨水の収集など、持続可能なエネルギー利用を目的として設計されていた。訪問中、都市開発が環境保護とどのように調和しているかを実感し、現代社会の課題解決のモデルとして非常に参考になると感じた。

最後にマリーナ・バレーでは、都市インフラがいかに住民の生活を支えているかを学んだ。この施設は水資源の管理と洪水対策を目的としており、シンガポールの気候条件に適応した先進的な技術が取り入れられていた。特に、ダムの仕組みが市民の生活用水や洪水のリスク軽減にどのように役立っているかについての解説が興味深かった。

これらの訪問を通じて、シンガポールが持続可能な都市開発に力を入れ、現代社会の課題に挑戦していることを実感した。また、都市計画において自然環境と調和させる姿勢や、住民の生活の質を向上させるための取り組みから、多くの学びを得ることができた。今後、日本でもこのような先進的な都市開発の取り組みを取り入れるべきだと強く感じた。

4. 現地の日系企業を訪問して感じたこと

この研修では主にアジア大洋州住友商事会社、JETROシンガポール事務所、三井化学シンガポールR&Dセンターを訪問した。

まず、アジア大洋州住友商事会社は、シンガポールを拠点に東南ア

ジア全体での事業展開を行っており、インフラ整備、エネルギー、化学品、食品など幅広い分野で活動している。特に、シンガポールでは金融機能を活かし、東南アジア市場での事業推進や地域間の物流のハブとして重要な役割を担っている。また、日本では法律の関係で実証実験が難しい、自動運転技術を実際の公道で実施するような活動を行っている。実際に現地で働く社員の皆様との座談会を通じて、現地の採用担当者様は学び、勉強、英語、人とのつながりをテーマにお話していただき、社会に出ると努力と経験が大変大切なことだと改めて感じた。私は来年度から新社会人になるが、社会人としての心構えをこの段階からしようと考えるきっかけになった。

次にJETROシンガポール事務所は、日本企業の海外進出支援や、シンガポールを通じたアジア市場の開拓をサポートしている。また、現地のマーケットリサーチやビジネスマッチングイベントを開催し、日本とアジア諸国の貿易促進に取り組んでいる。特に、スタートアップや新興技術分野へのサポートに力を入れ、現地企業との連携を深めている。これらのお話を聞き、JETROの活動を通じて、日本企業の海外進出には現地の市場情報やビジネスネットワークがいかに重要であるかを実感した。また、単なる貿易支援にとどまらず、新技術やスタートアップ支援を積極的に行う姿勢は、時代に合わせた柔軟な対応の重要性を改めて理解することができた。

最後に訪問した三井化学シンガポールR&Dセンターでは、主に次世代材料や持続可能な化学技術の研究開発に注力している。特に、環境に配慮した新素材の開発や、エネルギー効率の向上を目指した技術革新を推進している。また、現地の大学や研究機関との連携を通じて、グローバルな視点での技術開発を行っている。三井化学のR&D活動から、企業が持続可能性を重視した研究開発を行う意義を深く理解した。また、オープンイノベーションが社会全体の課題解決にどのように貢献できるのかを学び、自分もこのような未来志向の取り組みに携わりたいと感じた。

5. 最後に

これらの活動を踏まえて、文化・歴史的な側面ではシンガポール国立博物館やプラナカン博物館を訪れたことで、多文化共生が社会発展の基盤となることを実感した。日本占領時代やプラナカン文化のように、異なる背景を尊重しながら新たな価値を生み出す取り組みが、現在のシンガポールの多様性と繁栄を支えていることを学んだ。

また、都市開発では多くの最先端技術施設を訪問したことで環境に配慮した持続可能な都市開発の重要性を学んだ。資源に乏しいシンガポールがどれだけ創造的かつ効率的に都市計画を進めているかは、大いに参考になった。

千代田区は日本の行政や経済の中心地で、多くの観光客やビジネ





スパーソンが集まる場所であり、シンガポールの多文化共生の取り組みを参考に、多国籍の住民や訪問者が交流できるコミュニティスペースを提案し、さらに多文化イベントの開催をすることで日本にも多文化を浸透させるきっかけにもなると考えている。また、都市開発的側面では千代田区でも環境配慮型の街づくりを進めることで緑化プロジェクトや再生可能エネルギーの活用を推奨し、都市環境と自然が共存する街づくりを実現できると思う。

私個人として取り組みたい活動が2点ある。まず、大学内で多文化理解を促進させることである。私は現在、大学内でボランティア活動の一環として留学学生アドバイザーを行っている。その中でシンガポールで学んだ多文化共生の実践や異文化理解の重要性を学生の皆さんに紹介し、多様性の尊重や異文化理解の意識を広げる活動を行いたいと思う。学生や地域住民に異文化理解への理解を深めてもらうことで、グローバルな視点を持つきっかけを提供する。2点目はシンガポールで学んだ環境保全やスマートシティの取り組みをポスターにまとめ、区役所や小中学の生徒にも知ってもらうきっかけを作ることである。このポスターでシンガポールの都市開発や環境保全の事例を取り上げ、持続可能な社会づくりの重要性を伝える。また、地域のエコ活動や小中学の環境活動にも参画し、具体的なアイデアや施策を提案することで、地域全体の環境意識向上にも貢献したいと考えている。